岐蘇林學

第拾壹號

新竹縣五木寮山林學校
校友會

昭和41年11月16日
資料
蘇門会
木曾山林學校同窓会

岐蘇校友第拾壹號目次

校友諸君に望む　江畑會長
年頭の所感　伊藤教諭

論說

人格と修養論　松本清太
養生論　金田美行
撃剣の必要　新田忠次郎

學術

シユリツヒ氏著森林全書　小澤松敎諭
森林害虫に就て　西澤敎諭
八戸林學行政論　卒業生

文苑　詞藻

杓子定規　小澤儀一
水と岩　池木金三郎
屁智魔哲學　柳澤章二郎
火葬場　遠山一郎
現代の黄金崇拜病　北村竹次郎
夢に若松城を見る　宮崎新太郎
晩秋の想　森澤慶一郎
近事片々　宮澤記
評釋秋のくれ　遠山一書
新体詩

和歌　俳句

雜錄

大澤村林業概畧　卒業生　市川潔
砂防工事並に砂防植栽に就て　卒業生　小澤順
施業案編成員か出張地に於ける日常生活　卒業生　由尾忠輔
免害豫防の新法（山林會報）

紀行

平蕩紀行　木下稗藏

端書便り

雜報

校内記事　神宮遷御式に關する講話○三學生の利用實習○庭球部の遠征○河村理學士の講話○天長節の拜賀式○伊藤公追悼會○坂上、間宮兩廓師の講演○日義村發火演習○赤浦先生の告別式

校友會彙報

矯風會設立
研究部記事　臨時會並びに例會、運動部記事○庭球部○撃剣部○弓術部○紀念大運動會會員の遠近○紀念品贈呈に就きて

廣告

編輯局より（必ず御一讀下され度候）

寄贈雜誌

本校卒業生方向調

岐蘇校友　第十一號

校友諸君に望む

東京帝國大學農學部山林學校
校友會

波多

古語に數は一に始まり十に終はり十なれは則ち更む故に紀と曰ふと一紀は即ち十年である、我校創立十週年を迎ふるに當つて茲に特筆すへきは國運の發展と時勢の進運に迫られて本年度より建設物の改築に着手せられ兩三年ならずして教室輪奐の美を見る事と次に母校出身者百七十有六名假に本年三月卒業すへき者を合すれは二百有餘名で然かも其九十%は臺灣北海道は勿論異郷の險難を犯して然して愛校の至情を楯としてより高等專門學校卒業者の間に伍し實力を發揮し同時に本學と同程度の學校出身者と協力活躍しつゝある事の二者てある余は十週年に對する感想は次號に讓り此の好機に際して校友特に卒業生諸君か母校の守護と繁榮とに屈められ目下當校計畫中の教授資料の蒐集と校友會の革新更張の二事に同情と援助を與へられむ事を希望して然る後徐々敬意を表するのが順序てあらうと信す第一に教材の蒐集に關しては既に縣に豫算ありて歳々相當の金額を支出し新を追ふて生きたる材料の補充に勉めつゝあるのが林學は日尚淺く他の中學或は師範と異なり專門學に要する材料を民間教育品販賣營業者に千金を支拂ふも購入する能はすして而かも最も必要を感する者が多い又林學は應用の學なれは教職員の力によりて單に一地方の區域より採擇する材料のみによる能はすして廣く各地方に於ける林業上の標本技能或は習慣を比較し其優劣良否を研究するの必要が最も多い言ひ換ふれは營業者の手に係らすして廣く各地方より林業に關する材料を蒐集する方法を講しなければならない之には是非共校友諸君を煩はさゝるを得ないので教材中標本に關しては森林植物の葉樹實材鑑は勿論樹病害蟲及鳥獸及森林工藝

林産製造品等有ゆる材料を諸君山の隈水畔巡視の際或は商工業地視察の節一舉手一投足の勞を惜まず採集或は購入の上當校に送達してもらひたい既に高橋氏よりは數百種の醫葉を又清澤氏よりは米國産樹種を寄贈されたのは實に至重の標本である更に寫眞圖畫に就きては近頃盛に各地特有の造林保護は勿論伐木造材運材製材等の狀況を撮影し或は繪端書類に多樣に製作せられつゝあるが當校にて之を聚集する事は容易でないか校友諸君の同情によりて已に鵜殿氏よりは鴨綠江の運材大寫眞又杉本氏よりは韓國の森林狀況に關する寫眞十數葉を寄せられたるは唯一の參考並に裝飾品で身其境に嘯歌研究しつゝある感想を起さしめる又森林に關する事業經營書類又は森林講話並に諸種の調査物の印刷に附せられたる者及定期或は臨時の出版物は勿論校友各員の創見或は研究せる學藝並に規程の許す範圍に於て就職官廳の執務狀況各種事業及居住地の農林狀態農林功勞者の傳說民情等の報告類を寄せらるれは當校に於て之等を比較研究して隔靴搔痒の憾なからしめたい之に就きては客年夏期休暇に在校々友諸君に各自居住町村に於ける林業一般に關する調査を屬して其復命書四十有餘通を得た追て町村は勿論郡府縣或は諸官衙特種商工業場等に就き調査を繰返して精確なる者を得たい考てある斯くして校友諸君の寄贈或は調査されたる物件は永劫當校標本機械室に保留陳列して教官生徒の便益は勿論參觀者に滿足なる解決を與へしむる樣即ち當校をして從來よりも層一層林業界の改善進歩を促がさしむる唯一の機關にしたい就きては御請求があれは相當手續の許す限りに於て敍上材料蒐集に要する實費及郵税等は支拂をしたい考てある

次に校友會の豫算年額は三百圓弱てある之によりて運動器具機械より印刷費其他諸雜費を支拂ふのて年々財政難を訴へて餘裕かない何れの學校とも同し事らしくて新潟加茂農林學校の如きは校友會基本金造成の目的て民有地に地上權を設定して森林を經營しつゝあるが其適否は暫らく措き尙他に校友諸子の手によりて苗木を育成し或は製炭事業を企圖して販賣高を基金に繰入るゝも一策てあらうか更に又校友會か外部に對する活動機關として各方面に林業講演會を催すも是ならむ又有用樹種見本種苗を各學校團体等に配附するとか或は製炭樁葺裁培法其他利用方面に關し又造林施業按縞成法等に關する極めて通俗的なる印刷物を公共團体に配付して森林に關する知識を開導啓發するの方法もよかろうさて如何なる事業か最も適切恰當てあろうかを判斷するに同心審慮を要するか兎に角一草一木か近きより親られ森林曠野の遠きより測らるゝか樣に日常躬其局に當れる者は內部の事情に明なるたけ種々なる情弊に拘はるゝ嫌かあつて失錯に陷る事かあるか之に反して深く其事に接觸しない者には却て冷頭靜思其大體を觀察して公平にして奇警なる判斷を下し正鵠を得る場合か多い此見地より特に校友諸君の善謀善斷を望むのて我校友會も未た室咲の梅たるを免れない都合よけれは美果を収めて彌天羅地に至る事を得へく凋落すれは地獄冥府に行かあけれはならぬ高鼎の差は千里の隔となるのて之を苟且に附する事はてきない唯吾人の到達点は校友會の本領を益々發揮し浮華の行動を避けて堅實の効蹟を擧けたいのにあるのみ

要するに舊時の札幌農學校か北海道開拓創業と共に起り拮据經營三十年間に多樣の方面に實蹟を發揚し其結果先年組織を最高學府に變更したるか如く本學も內容の充實と實質の完美に念々不斷の精進を以て得意高潮の秋に遭遇せん事を期するあるのみ

年頭の所感

伊藤敎論

例によりて例の如く、年玆に改まる、幸に吾徒をして、例によりて、新年の辭をなさしめよ

敢て、新年の所感と云ふと雖も、吾徒平生の主張にして、實に時代の管見のみ、斬新、奇拔、變手古、異例の說

にあらす

あゝ四十二年

其事業界の現象如何なりしと、回顧せよ、所謂戰後の不景氣、絶頂に達し、慘憺の狀、目もあてられさりしにあらすや。

偶々、日糖、郵船、東洋寶田石油、等の諸會社、其失敗を、暴露して以來、事業會社の信用地に落ち、技術權威消散しぬ。

戰後事業、亂興せむとするに當りてや、凡ての技術家は、世の歡迎を受け、技術家の新說、妙論は凡て世人の謹聽する所となりぬ、我林業界亦然り、過去の事實は、吾徒の指摘を待だすして、諸君の記憶に、新なるへし由來、技術家の新骨頭は、其技を樂みて、世俗の名利を顧さるにあり。或は、物質論者の見て以て、不幸薄運となす所は、眞正の技術家の主觀として、至幸の境となす所なり。

夫の、デオゼネス樽の中に生活す、歷山王、其不幸を憐み、之を物質的に厚遇せむとして、訪問す、デオゼネスは、其境に甘して、歷山王と感を同うせす、世の物質論者、社會主義者の徒の、見て以て憐む可しとなすもの境になるもの、必すしも、まかし不幸を、主觀するものにはあらさるなり。

技術家は、世俗の人と撰を異にして、名利を追ふに急あらす、專心、修養、其技を樂むにあり、然り、社會は眞正の技術家によりて、示導、進歩するものなり。

不幸、我邦現代、眞正の技術家を出す、實に稀少。

偶ま、技術の學を、學ひて、校門を出するものも、名利を、追ふに急にして、亦技に忠なるもの少なし、故を以て我邦の林業の如きも、進む可くして、未た、一歩の進境をたも認むる能はす、神聖なるへき技術官は事務官聲色をなして、得々たり、事業の隆起せざる、深く其基ひする所あるなり、吾徒の主張は、技術家の自重自覺にあり。

技術家の自重に、基ひせすして起る事業は、斯の、空中に飛揚する凧の如し、其隆起するは、實に僥幸のみ、一朝時勢の變轉を見むか、片々地にしく、現代我邦の事業社會の如きのみ。

あゝ、我校友は、技術を樂しむの一團なり、邦家の爲め校友幸に自重せよ。

人格と修養論

松　髯　生

人格と修養之れそも如何ある關係を有するや。

人格とは修養の結果なりと云ふも可ならむ、何となれは人格とは自己の精神作用に修養鍛練を加へたるものなれはなり、即ち智情意の三者か相統合融和して此に一の精神的物產となり以て吾人の意識的行動をなすを以てなり、而して人格は又個人に依て其程度强弱の差異あるか故に性格の高きものあり低きものあり、强きものあり又弱きものあり、乃ち俗にあの人は氣高いとか或は人柄か善くないなと云ふことなり、蓋し人格の高尙なる者は其行動又高尙にして奥床しく見ゆるものなり、而も此人格を修練することは人間として最も急務緊要なる

ものにして、然らざるものは如何に冠衣の善美を以て身を裝ふも之れ只一個の衣冠猿猴の類と何の撰ふ所あらん、此に於てか人格修養の忽にすへからざるを知ると共に、如何に人格なるものか人物を修飾し光彩あらしむるか、蓋し思ひ半はに至らん、去れと又人格の高下强弱の度は其人に依り多少先天的遺傳性なきにあらされとも其多くは平素の修養鍛練に依りて構成せらるゝものなり、彼の大聖ソクラテースを見よ、垢面禿頭身はいつも繼縫敝衣を纏ふと雖も其人格の一點に至つては高潔にして雄大、誰かよく彼を動かすことを得む、彼は例、時流に逆ふて毒杯の爲に斃るると雖も尙弟子門弟に偉大の感化影響を與へしにあらすや、更に釋迦牟尼世尊に付て見よ、身は萬乘の刹帝寶位にありながら眞理の爲めには寶冠瓔珞の榮華を避け、具さに數十年間の難行苦行、此に於てか一切の煩惱を絶することを得て、佛陀の正覺を開き無上直證の道を得て大解脫に到達せられ以て餘德は長く一切衆生の救護の大慈悲となりしにあらすや、之れそも何の至す所ぞ、人格の高潔雄大なるものにあらすんは誰人かよく此の如きをなすを得ん、去れと人格なるものはたとひ釋迦、ソクラテース、と雖先天的に固有なるものにあらす、而も世人の思惟する如く智識の發達のみを以て養成せらるへきものにあらすして又よく實際的事實に遭遇しては幾多の實驗修練を經て始めて鍛上くるものなり、今、古今東西の偉人傑士か後世人より欣慕尊敬せらるゝもの之れ皆一生を通して修養の途に在り、身自ら世の迫害苦痛と戰ふて、而も不撓不屈の最後の勝利を得しの人なり、換言すれは幾多の實行的修養を經て偉大なる人格を構成せしものなり、故に後世人の渴仰誘化せんとするも又故ある也、彼の梅花の凌々たる、古松の蟲たる之れ皆嚴冬酷寒凌雪貫霜の苦節を忍んて初めて人に愛憐有用せらるゝかり、人も亦然り、古の偉人と稱せられしもの概ね修養の結果人格の俗流を超絶するを以て當時には或は誤解せられ曲解せられ、迫害の中心にあらされは天寒の悲運にありと雖も、しかも尙彼等の自信自負、即ち修養の結果は富嶽の夫れの如く巍然として群山を超越し、偉大なる人格は到底俗流の之を滅却すること能はすして却て彼等の迫害壓制は偶々凡て彼等偉人の決心を堅ふし自信を昂むるのみ也、暫し聞け、靈界の偉人日蓮大聖人か生涯を、彼一度立つて當時淨土禪門の盛大なる、天下の覇府鎌倉に四個格言を標榜し、一切諸宗を排して無得道と大聲渴破するや、諸宗の僧俗嫉妬怨恨瞋恚の炎、焰々として忽ち罵詈惡口は彼れの身邊に蝟集し、或は瓦礫林木を飛はされ、或は深更庵室を燒かれ、或は深大の刀痕を被りち惡口は彼れの身邊に蝟集し、或は瓦礫林木を飛はされ、或は深更庵室を燒かれ、或は深大の刀痕を被り或は瀧の口斷頭場臺の泡沫と消えんとし、或は流罪北海の氷雪に凍死せんとせしも益此障碍大難は愈彼が折伏匝化の念を堅ふするのみなりき、ア、此の牢として貫くへからさる、頑として動せさる金剛磐石の信仰誰人のよく之を聞きて敬服冀望せざるものあらん、さもあらばあれ、權迹諸宗の法敝を平け、一起一伏妙法秋水の光明は暗墨昏昧の世を照破して、今や將に一閻浮提廣宣流布纏て一天四海皆歸妙法の近きにある、豈全く故なしとせん、あゝ彼が超凡の忍耐勤勉不屈不撓の精神あるにあらずんば誰かよく此の如きを得ん、千辛万苦も法の爲めや、世の爲めにし、學問修業其効積んで御經の大小權實諸宗の義理を直下に見なし、身も惜まず末法の衆生を救ひ得させんと、身にも不應大願も佛の敎、是非なしとの堅固なる信念、これ此の如し、即ち人の一生は修養時代なり、日蓮が生涯又此の如し、名を棄て利を避け不惜身命偏に妙法の護持に勉め以て一切衆生をは救はんとはしたるなり、古の英俊勇邁の人これ皆此の如し、吾人が茲に人格修養を絶叫するもの又此の如し、即ち余の論する人格修養は要する所智識の進歩を務め、感情の圓滿なる發達を遂げ、意志の强固鍛練を謀つて三者を統一し調和し以て吾人が行動の原動力となし、主義ある統一ある生活を送るを云ふなり、故に智識の發達のみ人格を作るに足らす、又感情の圓滿のみが人格を作るに非らす、智情意の三者相待ちて始めて之を完全にするを得るなり、故に智識の進歩を計ると共に實際的事實に遭遇しては決斷よく是に堪へ、例令苦境に沈淪するも、不撓不屈古英雄の心操を學んで益自已精神の鎔鑄鍛練を謀り强き人格を養成し苦痛悲運は充塞するも頑として動せざるの人となり、よく先途の光明を認め誠心誠意向上の理想に向つて行住座臥も造次顚沛も忘るることなく勇猛突進せざるべからす。

養生論

園美

人々好む處のもの各異りと雖も、其の名譽を博せんとする、其の巨萬の財貨を得んとする、其の天爵に關せす總て之れ勤勉に由って得ざるはなし、而して勤勉なるものは何に由て之を得るや、曰く、身体の壯健なるにあり、西哲曰く「强壯の身体には確乎不拔の腦髓あり」と、實に然り、羸々然たる喪家の狗の如き体軀にして、豈に能く剛健不屈の精神を有するを得んや、古來、英雄豪傑の士、善く盤根錯節に遭遇し、毅然として撓ます泰然として愕かす、事を處するに當つて快刃亂麻を斷つが如きもの、或は冒險家の時に鯨鯢を侵し、時に鮫鰐の淵に臨み、災厄、具さに至りて屈せす、起業家の千思万考、財を傾け妻子を餓孚の域に致し、困憊極りなきに至りて志を替へざるもの、一に剛健の精神を修養する所の健康なる体軀に因らざるはなし、已に然りとせば人間の最も貴重すべきものは身体の壯健にあり、而して身体の强壯ならん事を欲せば半素の養生適當なるにあり、人、設し衛生の道を講せす、逸遊度なく、暴飲荒食せば果して如何、忽ち疾患に罹り、身体衰弱に陷り、獨り事業を阻害するのみならす、延て國家に盡すの職分をも完ふする事能はざるに至らん、其影響するところ小は一身一家の幸福を傷ひ、大は國力の發展を害するに至る、試に史を播いて古今東西の盛衰消長に留意せよ、思ひ半ばに過ぐるものあらん、方今青年子弟の恒に口舌の末に走り而して雄大の志操に乏しきは何ぞや蓋し壯心雄圖ありと雖、强健なる身体の是れに伴はざるに因らずんば有る可らす、豈に、猛省せざるべけんや、

擊劍の必要

新田忠次郎

其れ人間萬事元氣にあり、元氣は如何にすれば生するか、勇氣を常に有するにあり、されば勇氣とは如何なる事を云ふか、我々青年輩が肩を怒らし大なるスラッキを手にして人前をふり廻し、或は大聲を揭げて歌ふは勇氣か、世には往々彼を以て一つの勇氣なりと考へ夫れを得意とする者無きにしもあらす、余輩は思ふ是れ決して勇に非す、眞の勇氣は即ち正義の爲めには何事も恐れす進んで爲し又臆病ならざるものなり、

うの元氣に必要なる勇氣は如何にして得らるゝか、是れ膽力あるに因るのみ、而して膽力は天性にもあれど習慣より得ること又大なり、其の養成方法は古來幾多あるならん、然れども我々青年として又大和民族として

の尤も適當なる夫れ擊劍にあるか、擊劍の効は膽力を養ひ敏活の精神と質朴なる氣象とを養ひ、且つ青年に取りて最も忌むべき淫靡の惡風を根底より除去する點にあり、

思ふに文明日に進み醫學衛生等其道大に啓けたりと雖も、其の一般健康狀態に至りては或は之と反比例の現象無きに非す、之れ全く一般運動の不足と他の惡風に傾きたる弊より起りたる者に非らざるか只運なき動のみを主とするならば幾多方法あり、然れども上進する處の尙武的精神を養ひ併せて身体の健康を保持せんと欲せば須らく此の運動の唯一最良のものたるや論を待たす、激烈なる生存競爭場裏に立ち他日社會に事を成さんと欲するもの何ぞ元氣無くして最后の勝利を得らるべき、又我々第二の國民として祖先傳來の我國獨特の武術を發揮する亦一の責務には非らざるなけんや、親愛なる諸兄よ、願はくは奮へ。

シユリツヒ氏著森林全書第一卷林政部

小松教論譯

第二節　工業の目的たる林業

森林は陸地の一部を占むるものなれば廣義の農業の一部にして農林業共に工業の主要なる目的物にして資本の大部を供給し及諸種の勞働を必要とす勿論林業の勞働は農業のそれと異れる點多きを常とす

A、林業資本

林業の資本は土地及立木よりなれり立木は連年生長の蓄積したるものにして隔年作業あるときは資本は時に變化するとあれども連年收入を確實にし資本が常に同一に殘存すべく整理せられたる森林にありては林地と春期に存在する立木との和は即ち林業資本ありとす通常林地は林業固定資本にして立木は流動資本と稱せらる而して此等の額の大小は樹種、作業種伐期の長短により變化あるものにして矮林作業にては林地は立木より其價大なることあり又喬林作業にては立木は林地より遙に多額なるを一般なりとす例へば茲に「すこつと」松の森林あり其面積百町歩伐期百年にして毎年の收入を同一にせんとせば全面積中一町歩は一年生他の一町歩は二年生又一町歩は三年生の如くに立木は存在すべく即ち各一町歩に一年生より年次百年生に至る立木を有すべし此の如き森林なれば毎年最老樹は百年生にして之れを伐採し直に其跡地に造林せば殘部九十九町歩の森林には一年生より九十九年生の林木存在して翌年は百年生の林木を取得しうるととなるべし此の如く整理せる森林を吾人は法正林と云ふ以上の如き樹齢の配置なかりせば毎年百年生の林木を規則正しく取得すること能はざるなり今樹齢と森林資本との關係を表示せん

伐期	面積一Acreに就き 森林資本 一等地 林地	林木	計	二等地 林地	林木	計	三等地 林地	林木	計
30	25	6,	31,	12	2,5	14,5	4,	,25	4,25
40	25	13,	38,	1,2	6,	18,	4,	2,	6,0
50	25	23,	48	12	12,	24,	4,	3,	7,
60	25	38,	63,	12	22,	34,	4	7,	1I,
70	25	58,	83,	12	35,	47,	4	12,	16,
80	25	81,	106,	12	49,	61,	4	19,	23,
90	25	107,	132	12	66,	78,	4	26,	30,
100	25	135	160	12	84,	96,	4	34,	38,
110	25	165,	190	12	104	116	4	43,	47,
120	25	197	222	12	124	136	4,	53,	57,

此表により次きの事實を知れり

(1)、資本は伐期の長さと共に增加す

(2)、立木の價は生長期の初めに於ては林地の價より小にして五十年乃至六十年に至り殆と相等しく百年に至り立木は林地より價格大に增加せり一例として百年伐期に於ける者の比を上くれは下の如し

一等地	林地一	立木　五、四
二等地	仝仝	仝仝　七、〇
三等地	仝仝	仝仝　八、五

(3)、用材林に於ける資本は通常林地より高價なり若し森林が農作より一層有利ならば此の如き土地を絶對的林地と云ふ

次ぎに森林は經濟上特種性質を有するものなり即ち

(1)、一般に森林は人工的肥料を施すを要せず即ち樹木は農產物より鑛物質を一層少量にて足るものなり彼の「えーべるまいや」氏の調査によれば樹實木材樹葉は年々農產物が必要とする鑛物質の五十四%に止れり且つ此量の四十六%は樹葉にありて僅に四%は木材中に存在するものなれば枝葉を盡く林內に殘存する時は林地は瘠惡とならず、換言すれば普通至る所の土壤は施肥を要せず、木材を生產し得べく殊に連年の落葉蘚苔は反て土壤を肥沃にし學理的性質を優秀ならしめ人工を加ふることなく改良するを得べし故に肥沃なる地は農地となり劣等なる地は林地として自然に存在し區分せらるゝを知る

(2)、凡て土地生產物に害を與ふる根源は天候動植物及び人類ならん、而して此等の危害に對し農產物は僅に一年或は二年の短時日間に相遇すべきも森林の木材即ち多年の蓄積は常に諸種の害に感しつゝあり、又一方に於ては林產物は農產物より危害にかゝること少きを普通とす森林の最も恐るべき害は火災昆虫の害、及暴風の害等なり火災は往々全林を燒滅することあり特に針葉樹林に然りとす昆虫の害も亦膠大害をなす然して暴風は一時に多數の立木を轉倒し中年の林は大害をうく然れとも此の如き諸種の害は周倒なる森林經營の手段により小程度に減し得るものとす

(3)、農業上に於ける失敗は普通一年限りにして恢復し得るも森林にありては多年の後初めて其策を講し得るものなり例へば茲に造林の樹種撰定を誤りしとせば十數年後に至るまて其失敗を發見する能はず何とあれば土地に適せざる樹種も最初は殆と一樣なる生長をなすものにして二三十年後に至り適樹ならざりしことを見る

を普通とすればなりされは最初の失敗を除かん爲には林業は農業より一層緻密なる注意と熟練とを要すること明かなり

(4)、用材も薪材も運搬に不適當なる容積ある貨物にして殊に陸上にては農產物に比し小城に止るものにて水運の便あらざれば林產物は生產地の周圍にのみ限界せらる

(5)、資本減少の危險は林業は農業より大なり農業は過度使役又施肥の不足により地價を或度まて減することあれど此等は容易に發見しうべく又恢復しうるものなり然るに林業上資本の大部は立木なるを以て拙劣なる林業者は不知中に容易に資本を減するに至る此點に於て再び林業は農業より大なる熟練と注意とを必要とす

(6)、森林は他の土地よりも多く第三者の權利により拘束せらる即ち所有者の權利を縮小す所有權が完全なるときは國家の一般法律に服從して所有者の意志の儘に所分し得れとも第三者の權利を負担する時は所有者の權利は其れが爲限定せらるゝことあり此權利中には第三者が林產物を取得するもあり放牧又は狩獵の目的に林地を使用することもあり之れ第三者の權利所謂林役權は人に屬するあり財產の一部に屬するあり而して人に屬する場合には其死と共に權利は消滅するも財產に屬するときは一つの權利者より他の者に財產と共に移轉して消滅せず普通林役權は森林經營上及利用上少からざる障害を與ふるもの也然れども多數の場合に之れを

避け難く國家經濟上甚だ不利なれば釜限定し整理せられんとす

(7)、森林財産は其眞價にて金融すること能はず林地は絶對に安全かれとも林木は諸種の危害に放樂せるのみならず拙劣なる管理の爲に大に其價を減するも尙ほ數年間發見せられざること多ければなり

B、林業に要する勞働

森林には種々なる勞働を要すれとも大別すれば次の三項となる

1、森林行政（造林、保護、林産物取得）

2、林産物運搬

3、森林に關する工業之れなり

(1)、森林行政　林業に要する勞働は林産物の多寡經營の周約の程度等により大に異れり勿論精密なる統計を以て示すと能はされとも林地は毎町毎年五日の勞働を必要とす之れ稍正確なる計算なりと見做さる此事實より獨乙國に於ける森林は毎年管理造林保護副産物取得伐木等に約八百万弗の經費を要し二十万の家族即ち百万人は其業務に從事せりとの計算を示せり新に森林が增加するに從ひ勞働も亦之れと共に增加すれども尙且つ林業は農業に比し少き勞働の減少に原因せり

(2)、林産物の運搬　木材の性質上其運搬は常に比較的大なる規模を要し用材薪材共に普通水運によれり獨乙國にては毎年少くとも四百万弗の運搬費を投せりと

(3)、森林工業　獨乙國にては毎年生産する木材に更に加工する勞力は森林の經營及運材に要する其れより大なり勞働者は鋸工場造船場建築業、車輛製造所機械工場、木紙寸燐、箱類玩具製造等諸種の工場は廣大なる森林の附近に存在せり此重要なる工業は林業と運命を共にす又農業と好都合に兩立するもの也、換言すれば農閑の時の勞力を多く利用しうるなり故に森林工業は山間の勞働者或は小額の工錢にて足るべき小農者に尊重すべき時期を提供するものなれば彼れ等が怠惰ならんには一つの勞働も與えざるなり農業は春夏秋に多忙にして冬間に林業に從事するの便あるを以て一方農産物の價額を多少減額する傾向あれば林業と農業との或適當なる配置は農業者に歡迎せられずして林業者に重要視せらるゝもの也

森林害虫に就て

西澤教論

森林被害中其の損害莫大なるものは何んぞや曰く火災曰く虫害なり而るに火災は多く人爲に基因するが故に須らく法律其の他規則上に適當の制裁を以て之れが保護取締法を制定せば勵行難きに非ざるなり然れども虫害の豫防驅除に對して人爲協力之か保護に力めざらんには遂に人力の救濟し能わざるに至るものとす

抑も害虫の被害たるや其の種類によりて多少の差あるは勿論樹木の種類年齢樹体の健否林地の性質季節天候等により其の度を異にすれとも一度被害に遭遇せるや其年に於ける樹木の生育の停止は勿論更に年々被害を重ずるに至つては林木の形態及ひ生長は之れが爲に毀損せられ或は全く枯損の悲境に陷らしむるの實例尠からず故に森林害虫の發生に對する豫防及ひ驅除の實行決して看過放擲して可ならんや加之も林業は所謂百年の長計彼の農産物其他の土地生産物に於けるが如く本年の凶は以て能く明年の豐に依り相補ふが如き年次的生産によりて相償ふものゝ比に非ざれば幾十百年間の苦心經營し來れる處の多大の勞費は一朝にして水泡に歸せしむべく多額の生産は空しく虫蕊化せしむるを思えば是れ實に其の森林所有者の不利不幸に止まらず延て國家經濟損失に及ぼす事豈大ならずとせんや然らば一虫一卵も決して等閑に附すべからざる所なり然るに從來各地に害虫の

發生蔓延せるに抱らす之れが除害救治の策を施したる者あるを聞かす之れ森林愛護の念あしと謂ざる可からす豈に遺憾の極ならすや、政府は已に茲に見るあり森林法の改正によりて害虫の豫防及び驅除に關する執行方法を制定せられたりされば其森林所有者並に當業者は特に此被害に對し一層の注意を拂わさるを得さるなり時恰も當校々友會報發刊に當り一般害虫の豫防及び驅除の方法を記述し諸君の參考に供す

甲　害　虫　の　豫　防　法

已に發林害虫の發生したる者を驅除するは甚だ困難なるが故に宜しく未發に於て是れが豫防に力むへし

其一　造林及利用上の豫防

凡て害虫は樹木の病害に罹り或は發育不完全なるものに寄生し易く且夫より追次壯健の樹木に侵害するを常とす故に之れか豫防方法は造林利用上の原則に從ひ充分に森林の成立發育を圖らさるへからす

一、土地に最も適當せる樹種を選定し且つ其の殖樹法に注意すへきこと

二、混交林の造成に力め以て種々の害虫に對し可及的抵抗力大ならしむること

三、林内の鬱閉を破らさる範圍に於て適度の除伐間伐を行ひ林木の健全なる發育を望むと同時に病木被害木は速かに除去すへきこと

四、土地改良に力め林内の落葉枯枝等の地被物は之れを肥料たらしめ又過度の濕地には排水の設備をあすこと

五、時々森林内を巡視して害虫の發否に注意を拂ひ殊に春季温暖なる季節には一層の留意あること

六、經理學上針葉樹林に於て全一令級の森林を大なる面積上に連續して存せしむるは一望害虫の侵蝕に對し蔓延の恐あるが故に伐採列區に分ちて施業すへきこと

其二　喰　虫　動　物　の　保　護

左に掲ぐる動物は害虫の繁殖を制限し從つて害虫の滅却は疑ふへきに非ざるが故に之れ等捕殺を防き之れが繁殖を計ること必要なり

一、哺乳動物

狐、貉、狸、貂、鼬、カワホツの類、水獺、鼬鼠、

二、鳥類

鴉鶫、百舌鳥、駒鳥、シロハラ、アカハラ、コアガリ、ムキマキ、鮫鷸、鶺眼、白鳥、鶯、メボソ、花鶏、小雀、日雀、四十雀、山雀、鳥柄長、五十雀、椋鳥、鵲、赤鵲、雲雀、ホヽジロ、アオジ、ホヲアカ、クロジ燕、岩燕、郭公、筒鳥杜鵑、怪鳥、ナイリツバメ、シマフクロ、フクロ、コミヽク、ハヤブサ、チコハヤブサ、チャウゲンボウ、ノスリ

三、両棲類

蛙、蛇、トカゲ、ヤモリ、

四、蜥蜴類

一般有益なり

五、昆虫類

チガバチ、アナバチ、キゴシバチ、キシバチ、トツクリバチ、ヒメドロバチ、アシナガバチ、ノバチ、キントウムシ、オヽバチカクシ、ウシムシ、オホコモムシ、ニハスズメ、ヒラタアブ、シリアケムシ、駱駝虫、草蜻蛉禍蜻蛉ムキワラトンボ、ミヤコヲカチ、オニヤンマ、ウチハトンボ、ヤンマ、オホカマキリ、カマキリ、ハラビロカマキリ、アカサシガメ、クロサシガメ、椿象、ヤドリバチ、アグハヤドリバチ、馬尾蜂、コンボウヤセバチ、ミカトアシブトウバチ、ワタバチ、等

乙　害　虫　驅　除　法

害虫驅除の時期は其の昆虫が一つの變態より他の變態に移らんとする存續中最も長き時期幼虫蛹及成虫期の四發育中最長き時期に於てすへし例ゐば卵期か幼虫期蛹期若くは成虫期より長き時は卵期に驅除するを有効とす

其一　卵　期　の　驅　除

植物或は地上の如何なる部分に產附さるゝや其の產附の狀態を調査し樹皮面に固着し移動せざる者は介殼、竹篦、小刀等にて捻殺するか或は捕獲して燒殺することに力めざるへからず

其二　蛹　期　の　驅　除

卵期に於ける如く捻殺するか或は燻殺すべし

其三　幼　虫　期　の　驅　除

一、高き樹枝等に幼虫の群集する時は竹竿の先に襤褸を括り附け石油を灌ぎ火を点し或は竹竿の先に鐵葉製の球を附し球周に數個の孔を開き球内に石綿を容し石油を注ぎて点火し燒殺すべし

二、樹幹に群棲する者は刷毛類を以て幼虫を拂て殺すべし

三、樹梢に棲息する幼虫は柄長鋏を以て枝を切落し之れを捕殺すべし

四、幹孔に棲息する木蠹虫及鐵砲虫の仔虫の如きはスポイトを以て殺虫液を注入するか或は火藥を以て爆殺す但し火藥は爆發力の小なるものに限る

虫土中に棲息する根切虫の如きものは硫黃石灰水石油等を散布するか或は苗圃の如きは播種移植の着手前年に於て土地を耕鋤し寒氣に曝し幼虫の凍死を計るべし

六、或る種の害虫は寄生木を喰ひ盡せば樹幹を降り他樹に轉するものあり斯る場合に這登に先ち根際より上方に二三尺の處に帶狀に釜兒を塗付し這登を防ぎ時々巡回捕殺すへし

其四　成　虫　期　の　驅　除

一、打敲法各種の金龜子の如きものは樹木を振動すれば容易に墜下するものなり朝夕若くは冷かある日に於て木槌等を用ひて打敲するか或は小樹に於ては手にて振動せしめ其の落下せる害虫を蒐集して燒殺すべし

二、薰烟法或る種の害虫に對しては樹下に於て生枝葉を燒き之れより散出する薰烟に害虫を眩暈せしめ彼をして自から火中に落下せしむるも亦効あり但し曇天の日曉暮を可とす

其の他驅除に類しては殺注劑、誘注劑の如き藥品を使用することあり

一、油　類

石脂油、石油、魚油、タール、テレヒン油、

二、化　學　的　藥　劑

石炭酸、石灰、硫黃、青酸加里、那不多林、

三、合　劑　類

石油乳劑、石油合劑、ボルード液、

四、浸　汁　劑

除虫菊、煙草、クラ、、カナムグラ、トヲカラシ、等の落實の煮汁、ニガキ、ツヂウツギ、ハナヒリノキ、クルミ、シキミ、サンショ等

八戸林學士森林行政論

伊豫新居濱　綠山道人

回顧すれば早や三星霜、住み馴れし木曾が帝都を出でゝより身は四國別子銅山の山猿となりぬ其間の生活實

に千變萬化時には別子異徒の燒打事件に遇ひ近くは煙害地農民の襲來に遇ひ又山中に於ては製炭に造林に將に砂防に終日馳せ廻り御校校友會に對し何か寄稿と思へども淺學韭才別に破天荒の卓說もなく又他に何か御研究の資に供す可きものと思へども前途の境遇ありしを以て常に失敬致せしか昨冬以來少しく閑暇ある身となりしを以て茲に八戸林學士の森林行政論を揭け諸君の參考に供せんとす諸君幸に余の意を諒せられんことを

森林行政論

總論

森林行政學とは林務機關の組織並に林務執行の方法に就て論ずる所の學問を謂ふ

往時に在ては本學の範圍は唯國有林並世襲林に限られしか近時に至り公有林組合林私有林（殊に大所有）等に就ても其收穫の永續を計り尙其業務の發達を期する爲め秩序を整ふるの要あるを以て一般の森林に向て之れを研究することゝ爲れり而して國有林の行政組織は之れを移して略大所有の　公有林私有林等に適用すべく唯所有の大小業務の繁閑に依て之を取捨斟酌すれば則ち足れるが故に森林行政を說くに當ては國有林を主とする を常とす本書に於ても亦之に則り歐洲先進國の國有林行政を基とし我國國有林の現制を加へ傍ら其他の森林に說き及ぼし併せて評論を試みんと欲す

第一編　林務機關の組織

林務機關の組織即森林制度換言すれば林制は一國林業發達の程度に應して著しき差異あるは言を待たざる所なり例之森林測量は勿論國土の測量さへ未だ完成せられず全く圖面を有せずして林業を營み深山の樹木は樹木の養成よりも寧ろ重きを農地の開墾に置かるゝ處に在ては林務職員の智識を要する事低しと雖も事業周約の度高まるに隨ひ森林收入の增加を計る爲數理及博物上の智識を要し尙進んで一種特別の專門的術能を要することゝなる而して高等の智能を備ふる職員に向ては之を低度のものに比すれば廣き職權を委し獨斷を許すことを得るは自然の理數なり

歐洲の林制は千八百年頃始て現はれ以來漸次に發達し以て今日に至れり我國にては德川幕政の時に至り各大藩大概一種の林制を組織し以て森林の保護を計りしが維新の政變に逢ふて全部瓦解し明治の代に入り幾多の變遷を經たる後終に歐洲の例に倣ひて新に林制を組織し以て全國の森林を統一せり然れども運用未だ宜きを得ず活動未だ規に中らず所謂配腦僅に成て鹽梅未だ調はざるの現狀にありと謂ふべし

第一章　林務職員の編成

林務の機關は森林保護の任に當る職員直接森林管理の任に當る職員林務監査の任に當る職員及上記の職員を統御し且其業務を指揮統括すべき總管員より成立す尙最高位を占むる唯一無二の機關あり即森林中央局若くは森林所有主是なり

我國有林の制度を前記に準して次第すれば略次の如し

保護區員	保護員
小林區署長	管理員
大林區署勸務の山林技師並山林事務官	
大林區署長	監査員
農商務省山林局	總管員
又帝室林野の制を次第すれば略次の如し	中央局
分擔區員	保護員

帝室林野管理局支廳出張所長　管理員
帝室林野管理局支廳勤務技師　監査員
宮内省帝室林野管理局　中央局

大なる森林行政又特殊の事情を有する場合に在ては此の外尚特別機關を備ふる事屢〻なり即森林測量或は森林設劃或は森林會計或は林業附帶の工業に對して專門の廳衙を設くるなり例之獨逸の聯邦檢察に於ては森林測量局を特設し同撥遞に於ては森林設劃局同普魯西に於ては會計局同島嶼類山に於ては森林土工局墺國に於ては砂防局を特設するが如し我國有林行政に於ては曾々に林野整理局なるものを設けたりしが一年にして之を廢し今は山林局内の特別經營課となれり

第一節　森林保護員

森林保護員の任務なるや常に森林内に居住し間斷なく森林を守護して人爲の侵害（盜伐火災境界侵害等）を防ぎ又は動物（獸害害虫等）植物（徹菌雜草等）天然力（風雪寒暑等）に基因する危害を避け且造林伐木造道等に從事する總ての林業夫を直接に監視するにあり保護の任務其れ斯の如し故に保護員に向つて其の本務以外に屬する或る一定の業務を擔任せしむる事は勉めて之を避けざるべからず唯萬止むを得ざる場合に限りて之を許すのみ森林所有主にして若同時に狩獵權を有するときは森林保護員は又狩獵保護の任務を帶びるものなり

保護員の編成は獨逸の國有林に在ては各聯邦甚多樣なりと雖之を譯すれば下の三種に分る

第一　管理業務の習得者（即大學若くは高等教育を受けたる者）就職最初の位置として先づ森林保護員に任せらる其の職名を營林助手（フオルストゲヒルフエ）又は營林候補と名づく

第二　保護員養成の爲めに特別教育を受けたる者を以て之れに充つ其職名を森林監守と名づく

第三　林業夫中より選拔して保護員とす其職名を森林番人と名づく是なり而して第一第二の場合に在ては當

該保護員の下に更に低級の森林巡視と名つくる者を置き以て其の職務を補助せしむるを常とす獨逸國義泉大學林學科教授「リカードヘッス」氏は其の實驗上よりの見地よりして第三の森林番人制を以て最も良好なる方法なりとせり其の理由は林業夫は幼少の時より森林内に生活するを以て最も良く森林に慣れ親み一般に安心立命の地を得て過大の企望を有せず加之隨意に廉給を以て之を採用すべく又此の種の保護員は正式の專問教育を受けたる者にあらざるを以て業務に對する技能に乏しく隨て管理員が自已の職務範圍内に屬する業務を保護員に分擔せしむるの弊を防ぐに於て最有力なればなり

文苑詞藻

杓子定規

S生

眞の智者なる者は多く歸納して理をさとり學者肌の物知りは多く演繹して理をさとる、これ實行家と理論家との別るゝ所以、又學者の取つた天下なる所である理屈と云ふものは如何とも云ひ劍しが出來るもので德川家康が人の一生は重荷を負ふて長き道を行くが如し、いうぐ可らずと云ひたる一面の眞理はあるされど之を反對に「人の一生は用遠に行くが如しぐすぐすすべからず」と云ふも亦之れ眞理はある、

又家康が心に望起らば困窮したる時の事を思ふべしと云ひたるも眞理あれば「心にゆるみ起らば成功せむ時の事を思へ」と云ふも亦眞理である、

「果報は寢て待て」と云ふ諺は性急なるものには此上なき訓戒なれども怠惰者にはよい口實を與ふるに過ぎない

何にせよ時により場合により人に依つて道理も不道理になり、訓戒も罪惡の誘惑となる事がある、

人は常識に富み觀察力の鋭どき事が大事なるもので然らざれば論語讀みの論語知らずと成る可く又座上の兵法家とも理屈の實際家ともなるものである、

かゝる人は書を讀むにあらずして書物に讀まれ先哲の奴隷となり學問の奴隷となり先入の一理に執着して萬事を推さむとし所謂杓子定規となりて迂闊頑冥意に濟度する事が出來ないものである考えれは考ゆる程恐しいものだ

（終り）

水と岩

溪舟生

波濤澎湃琴々として打ち寄する所斷岩峭立巨岩屹として巨波と戰ひ花と散し雪と降し寄するもの屈せず當るもの撓けず、此の如くして終日終夜互に其の勇を競ひ根氣を比べ千百年に及びて已まざるは豈海の威と山の力とにあらずや、山意ありて然る乎、海威ありて然る乎、是れ固より知るを得ざる處たりと雖ども意識ある人間を以て之れに對せば此の自然の奮鬪以て大なる敎訓とするに足る、

何となれば水の常任攻擊的に出で百敗挫けず必ず岩を破摧せざれば已まざらんとするもの〻態度は以て薄志弱行の徒を皷舞するに足り、岩は屹然として之れに當り、あらゆる衝突を受けて動かず、變せず、反撥又反撥、水の猛勢を以て又如何とも成す能わざるもの、以て忍耐不屈萬難を排して終に自已の本領を發揮する、

世に所謂英雄豪傑に比す可ければなり、

戰ひては別れ、別れては戰ひ千百年の久しきに及べは海の力よく山を崩し岸を洗ひ去ると雖も一時の戰鬪に岩よく水を破り之れを飛沫とならしむ、兩者の勝敗多く軒輊す可からず、

動くものと靜なるものと、攻擊的なると、反撥的なると、兩者の趣全く相反するに似たるも若し精神ありとすれは其の精神即ち一、若し意志ありとすれは其の意志や即ち一、

忍耐、不屈、勉强、活潑、あらゆる奮鬪的性格を現わす事一見して之を知るを得可し、

抑も人類社會の進歩に伴ひ各種の競爭次第に激烈となり箇々孰れも大々的奮鬪を要せざる無く優りて勝ち劣りて敗する所以、

知識高下体格の强弱人格の如何によると雖も別に强固なる意志あり、不撓の精神あるにあらざれば最後の成功を期す可からず、然るに現時の我が國にありては近き將來に於て國民の中堅となる可き青年の精神意志往々にして薄志弱行不健全なるものあり、文運の進歩に伴ひ一般の知識方面の發達せるは喜ふ可きの至なるも薄志弱行の徒却て其の數を增し、或は煩悶と云ひ、或は厭世と云ふか如き、言語の流行を來し區々たる失敗に遭遇して再び之れを回復せんとする勇氣あるなく、然らざれば自暴自棄の狂態を演ずるのみ、不撓不屈人生の最後迄精神意志の鮮ならず、缺如せる趣あるは以て憂ふ可しとなすに足らずや、

人既に社會の恩惠によりて生長し國家の保護によりて存在せる以上例令、自已の身体と雖も自己の自由を處分す可きにあらずして必ず相當なる義務を社會に盡し責任を國家に全くせさる可からす、自已の爲めに成功すると共に又國家社會の爲めに成功せさる可からず、失敗にあり勝の事何ぞ之れを悲しむを要せん、

要は我が生命あらん限り最後の成功に向て奮する事波濤の岩石に對する如くなる可きのみ其の實際に成功するとせざる事、之はを最後の時に見ば可、中途に斃れたる軍人も明日の戰捷の功勳を荷ふにあらずや、外間の壓迫に對しては千劍万孔、猶凜然たる事、岩の水を攻擊に屈せざるが如くなる可きのみ、

青年の意志洵に如斯くならんか、國家の將來以て榮え以て盛なる可し水と岩と豈青年の學ふべく範とす可きものにあらずや、（完）

屁智魔哲學

柳澤秋峰

△勇ある者必ずしも愚なるにあらず、されど智なる者多くは怯なり、我は寧ろ愚なる勇者を愛す、

△人には須らく野心なかるべからず、野心なければ勢力無きなり、見よ、古來世界の大事業は悉く野心家の手に依りて成功せられしにあらずや、

△賢者と稱せらるゝは易く愚者と呼ばるゝは難し、内に德を積んで外愚なるは蓋し達人の事に屬す、宜なる哉、今の世は實に賢者を以て埋めらる、

△人を信せざるものほど愚なる者はあらず、彼等は五を失つて十を得ることを知らざればなり、

△人に同情を持たぬ者ほど愚なる者はあらず、彼等は廿世紀に於ける優勝劣敗の眞理を知らざればなり

△人に知られざらんことを恐るゝ學者青年ほど愚なるものはなし、彼等の頭腦は到底古新聞反故雜誌の塵溜たるに止まることを知らざればなり、

△兇器を翳し他人を脅迫して財物を奪ふものは强盜と云はんか、愚人を欺きて金錢を掠むるものを騙盜と命ずべきか、吾人は前者の露骨なるは寧ろ愛すべく後者の皮肉なるに更に大に憎むべきなり、

△人を誘惑する者ほど愚なる者はあらず、彼等は縷々喃々數百言を費すを以て皮膚一枚の下に現はるゝ相手の致顏色を窺ふことを知らざればなり、

△人を煽動する者ほど愚なる者はあらず、彼等は賢者の眼光、其肺腑をつらぬく事を知らざればなり、

△人の煽動に乘る者ほど愚なる者はあらず、彼等が得々たるの日は是れ纔て嗤笑指彈の日なる事を知らざればなり、

火葬場

冬生

◎火葬場とは延喜でもないとか、馬鹿な事を言ひなさい、人間に取つてこの位大切な、將又めでたい所があるものか、終りは即ち始めの結果だと云ふだろう、去て見れば人の一生は、火葬場さしての進行道中ではないか、千狀萬態、見果てぬ夢の是非得失英雄でも美人でも智者でも愚人でも、一つ煙の物のあはれさげに浮世の最終結論、日毎に持來る、大小貧富の棺、俺は受取る度に、一卷ヴ、の新刊書籍だと思ッて、火をかけながら、限りなき學問をして居るのだと、さる燒場の隧坊子が悟り顏に語つた事もあるとか、

◎世の中に一番悲慘極まる忌な場所は何處であろうゞ火葬場程慘ひ慘たらしい情ない所は他にあるまい、喩へ聖人でも賢人でも美人でも總て一朝息の根絶ゆる時は、此處へかつぎ込まれて燒かれて終ふのである、噫自分も一度は必らず此所で燒かれるのかと思ふと、人間だ……など〻悟ッた樣な顏もして居られん、早く其時の用意をせなくては、到底も安閑として正月だなどと大平樂に餅も喰つて居られなくなつて來た、

◎あゝ火葬場！昔て我祖母も此處で燒かれた、我愚ある人の尊屬も燒かれた、心兄も燒かれた、その青い凄い火が大蛇の舌の樣に棺を嘗め初めて、中から人体が漸次に現はれ出る時、人間の運命が今更どんなに悲しく想はるゝであろう　政事家とか實業家とか云ふ現在の事業にのみ齷齪して居る人々は、絶えて此火葬場を顧みない、顧みる僧侶は、之を錢まうけ處として居つて、燒かれる死骸は非滅現滅の福音の一分を敎育せんどしつゝ毎に徒爾に燒かれてしまう、死骸は定めて怨しい火葬場と囁いて居るであろう、

◎君過日ね僕の伯父が死でね、火葬場へ送つて往つた所が、斯樣いふ隧坊の話を聞いた、マア聽きたまへ、

「オイ六！此節は甚い不景氣ジャねいか、來る奴も〳〵客嗇な奴計りでよ、斯樣風ヂャ甘い酒も呑めねいジャねいか」『ホントに左樣だなあ、己なんぞは、此月になッてもう廿日計になるけれど酒の香も嗅ぎやしねい、構う事は爲いヤ、以後どし〳〵中味をオッ剝いでやろうぢャねいか」

ドーダ君、實に下層社界の狀態はあきれるではないか恰で彼等は地獄の鬼だね、

◎社會の要求物中最も必要なるものは火葬場なり、皇

内外の書を棄げて之を火葬し、天下の腐儒始めて警省の氣あり、楚人の一炬、阿房を火葬して絶代の驕奢を燒盡し、信長叡山を燒きて三千の頭僧舊夢を破り、天文の大火葬、京都廿一山を灰燼して、伽藍佛敎の外、始めて佛敎の敎義勃興す、火葬なる哉、火葬なる哉、吾は彼の鳥嶋群島の如く世界をあげて火葬し去らんと欲す、腐敗混濁、茲に於て跡なく、眞理の春草菁々として、彼の焦土の中より萠さん也、

◎鎖された鐵扉は開かれた、一刹那惡臭は鼻をついたチラリうの燒けくづれた姿は見へた、老親も未亡人もハンカチーフで顏を覆ふた、幼なき小供もケゲンな顏面して覗て居る、ひとり紙包を手にして隱坊は笑を含んで彼方に往くのである、

◎「君ちやん好ッて、あげますよ……アラ落したサアモ一度あげますよ」

「今度は先んの樣じやいやよ、アラしどいは、まただよようござんすよ、今度は敵討をしますからよ、ようござんすよ」

正月の二日君ちやんや愛ちやんの娘達、五六人は仲好く追羽子に興じて居る所へ、六才ばかりの奇麗な娘が羽子板を持ッて來たのである、

「君ちやん私も入れて頂戴な……」

「オヤ御正月は隱坊燒は用はないの……夫れじやモ、妙覺寺の妙子ちやんと遊ぶと似合ッてよ私達はあなたと遊ぶのは厭よ、……（微かな聲で）隱坊燒の娘……」

いやよの一語は如何に六才の娘に感しを與へたであろう、彼は何もいはずに羽子板を右手に羽子を左手に家の方へ駈けて去つた、

◎あれは何だ、ビールの製造場か、なに火葬場だと剛義に立派にしたな、僕は火葬場は國家の恩人だと思ふなせといつて見なさい、土葬をやめて、國民のすべてが火葬にすれば、國家の土地は不生産的に消費されずに濟むではないか、火葬萬才!!、其の反對に土葬亡國が乎、あはゝと塀外を通る書生語りぬ、

◎棺は既に火につゝまれ、多くの會葬者中、涙に咽ぶ者あり、合掌唱題する者あり、此時ひより平氣なる者は隱坊也、

導師は今や死者に對して敎訣を與へんとし、大衆一同至誠に住して合掌しつゝあり、此時「早くしまへばよい」と云ふ意を顏色にあはしをる者は隱坊なり、

吁、涙なき火葬場生活の人間、吾れ之を如何して度す可きか、

（十二月十二日松尾君の死を聞きて）

現代の黃金崇拜病

（かつて校友會にて物のせしもの）

北村播洲

入校以來初めての此演臺に昇るに當つて非常なる處の恐怖心が起つて何たか恐ろしい樣な氣がして躊躇して居つたが偉大なる處の意志の下に遂其惡魔を征服させて昇るは昇つたものゝ打勝つ戰鬪力のために大變エチルギーを費しりれが爲めにろくな話も出來んと思ひますので其邊は御容赦を願たひです、

で演題は現代の黃金崇拜病と云ふ面落たものですか昔から云ひつかへに論語讀みの論語知らすと申して居りますからはたして私が此病氣に罹つて居るか否るは自分で自分のことが判斷か出來ん樣な次第で御座居ます處で黃金の貴ひと云ふことは僕か此處で蝶々喃々と申すまでもないですが而し當今の社界及び諸賢は少し此黃金を貴び過ぎやせんかと僕は心ひそかに心配して居る次第で御座居ます黃金は昔から貴んで居りますりして黃金の貴と云ふことは時と處とを選びません結婚後二十五年を經れば銀婚式を致します又五十年を經過すれば金婚式を催されます其他黃金時代と云ふが如き或は黃金的中庸と云ふが如き或は黃金万能主義と云ふが如き之れ皆な良い處へ黃金の金の字を用ひた例です此字に於てすらこの樣に貴ひますまして其實物に於ては勿論なことです歴山王の御父さんの云はれた言葉に如何に堅固な城廓でも如何に高く丈夫な鐵壁でも黃金を荷ふた驢馬か乘りこせんと云ふ樣な丈夫な城廓は無いと云ふて黃金を稱揚されました又支那人の云ふた事に「黃金多からざれば交り深からず」と云ふて嘆息したことがあります斯れ如く外國人ばかりでなく近年我邦に於ても東鉄市營に關する市會議論が黃金のために動ゐたとか、或は日糖事件たとか又は大坂屠場事件だと云ふて數多、黃金のために議論或は意志が動へたことは僕か此處で述べるまでもなく諸君は毎日新聞で御存じのことと承知いたします、

金子堅太郎氏は帝國議會を稱して國家最高の建物たらしめよと又外觀は宏壯にして十分威嚴を保たしめよと云はれました此威嚴ある會議に參與する處の大國民を代表する人々に於て讀職歴名の下に法律の條文に觸るると云ふのは金子氏の言葉に對しても實に御氣毒千万

の話で此堂々たる代議士即ち一國の政事界に立つ帝國男子が當分皆な此黄金崇拜病になやまされて居ると云ふて間違ひ無い否羅つて居ると斷言して差支へなひましてや地方の青年或は學生が黄金の勢力の爲めに支配さるるのは無理ない處だろーと僕は考へます、

實に黄金の勢力の偉大なることは昔も今も同一です世には黄金を以て万能と考へる者が少なくはありません現に地方の青年學生の間には之れが盛にあをき立てられて居ります所謂成功と云ふことは徹頭徹尾黄金崇拜熱だろーと考へます、

いや隣村の何某は紙くずひろひから大なる金滿家に成つたとか或は何某は丁稚から成上つて實業界の雄將と成つたとか或は何の何某は魚屋の觸れ賣りから出世して大なる商人と成つたと云ふて之れを鬼神の樣に崇拜して所謂りの苦心談とか成功談とかを爭つて雜誌等に記載し掲げてうーして又今日の崇拜熱の高い青年學生は之れを有難がつて讀んで居ります丁度漢學者が四書や五經を讀む樣が實に他から見たらおかしいものだろー思ひます尤のことです政事界にたつ帝國代議士ですらも此黄金崇拜病に罹つて居る現代に於て地方の無學文盲の士に於ては殊更のことです斯の如き當今の上流社界と云はず下流社界と云はず此流行病者が中々多い樣です人間の努力勤勉が必竟黄金を得るためだと云ふたならば實に其精神に賤い事其人の人格の無いことは此極です實に憐むべきものです、

而し僕か斯く申すからと云ふて必ずしも黄金は不要だと云ふのではありません實に吾々人類は此黄金を離れて一日も生活することは出來んのです衣食住は之れ皆黄金のために得らるゝもので此黄金が無かつたならば生命を長らへて行く事か出來ん次第です、

ですから此黄金は或る程度までは無くてならん品物で實に貴く又其勢力の偉大なるものです而し之れを得るに必要なる道義が一つあるのです即ち正當の收入は其最も適せるものと考へます、

昔から黄金を稱して御足と申しますが何のために御足と云ふかと云ふに懷中から思つたより多く出して丁度足を有して居る樣だとか何とか云ふので此言葉は專ら此熱病者の間に云はれて居る樣に見受けます勿論の事ですな此黄金を得る時に一寸したさもないことで莫大の黄金を收得するのですから其金のさもない事に澤山出るのは自然の勢です正當の精神を以て充分なる勢力に依つて得た金か何で御足がありませう現今の如き貨金の低落の時代に其樣な金のあり樣か無いのです此黄金を正當な道義に依り其エネルギーの結果を得其中の幾部分蓄へて不事の難にあて必要の程度に應じて黄金を稱揚するのは實に人格の高尚にして其精神は神靈の如きものです諸君は今上流社界を犯し下流社界に其害を及ぼしつゝある此流行病に罹かられず黄金を以て中庸に崇拜せられん事を切に希望する次第で御座居ます

木下闇銀の泉が流れけり　涼支

夢に若松城を見る

宮崎秋畝

一日鶴ヶ城の故址を尋ぬ荒草乱離の間、わずかに殘壘の存するのみ、戊辰の昔感轉に切なり、籠城三旬、而も屹然大草に抗す、渠壁の死屍、窪渠の碧血、今尚髣髴たるを覺ゆ、伏屍枕藉十有八、孫を刺し妻子を刃し列座香を焚き城を拜して自盡したる内藤、上田の勇魂今安くにかある、深夜月明かに、竿を取り「明日よりはいづくの人が眺むらんなれし大城に殘る月かげ」と城壁に刻したるの女丈夫、今や渣として無し、風浙々雲慘々、

砲絲跡絶二十餘年、殘壘頹垣更堪憐
騷客不關往時之怨、漫將又筆賦山川
國亡家破二十餘年、書劍飄零獨自憐
宮裏無人春草乱、殘陽空照舊山川

古を追想して以て今日に至れば殘壘の下草の裡にある余をして轉た感慨俯仰の念に堪へざらむ、噫々若松城何ぞ孤客をして一に此に至らしむるか、

晩秋の想

宮澤慶一

灰色の雲が怪しう西に流れて遠山のあたりは時雨でも降つてゐるらしい夕自分は淋しい思ひを抱いて獨り小丸山に佇んだ、

見渡す限り落葉し盡して滿目荒寥たる光景に此の間別れた友の境遇がおのづから思ひ出されて茫然として芝生に腰を落した、

あゝ秋も暮れた、ツイ二三日前迄淋しいながらも花壇を飾つてゐた白菊もいつしか枯れ果てゝ冷い夕風が眞黑な杉の梢を吹いてヒヤリと襟を撫でる、

今朝來た故郷の友の手紙を又繰り返して讀んで見ると

背つてよりの心臓病か日々に重くなつて明日にも知らぬ身となつたと云ふあの筋張つて太い腕からつては校庭のマッチに赤軍をして戰慄慄情く能はざらしめた腕が今は一管の筆にも得堪へず僅かに紫鉛筆の震ひ書きにある。

「悲しき運命の擒となつて愈々暗路に迫り入るべし」と

盱友かこの手紙を書いた時のうの心の中はどんなであつたろう……

過きし八月僕が木曾に來るとき「僕は潮畔に畑でも耕して時節を待ごふ興來れば詩を作り繪を描いてそして自然を樂しまうと些の不平も洩さなつかつたが其强き肉體と固き信念とを以つてしてさえ胸を鬼ぐるが如き病の苦しみには堪得ず弱い言を吐いて居る矛盾と知つた人生に居つて今更嘲つ迄もないか憎いと思ふ不德の奴程不思議な健全で懷しい罪の立いものに限つて衰れ多き悲運の淵に沈む、世は益々惡魔の跳梁する所となつて善能の神も見捨てたのであろふか、

思ふとなんとなく秋の凋落が自然許りでなく人間にも含んでゐるかの樣に思はれ染々と人生の果敢なきを感じた友は草花が好きでいつも家の庭に並べて手培するのを樂しみとして居つた彼の今は恐らく病窓を飾る花もあく堪淋しがつて居やふ、美しかつた草花は根迄も枯れた我が友も此樣に……と思ふと自分はもう得堪へず脫兎の如く圃を駈け下りて街へ出た苦痛を癒さんとして散策して自分は更により以上の苦痛を抱いて寄宿に歸つた、

近事片々

森田溪水

◎木曾山林　運材模型長野共進會に出陳して喝采の聲

内務省に響き這般地方改良事務展覽に出品被命

◎我庭球部　の健兒拾名全校の嘱望を双肩に荷ひて縣下中等程度の撰手と上田に戰ふ奏校鳴靜待快報

◎快報來る　曰く小石向井組優待の飛電に歡聲如湧最後の決勝に脫班難可惜我庭球志氣の鼓舞や蓋大

◎第八回の　秋季大運動會は去十月晦日擧行せられ菊花紅葉の滿庭飾人目を惹き加之意匠亦崭新可喜

◎崭新なる　意匠中の崭なるは大時計空中飛行機乎遙針に從て大鐘時を報し觀客趣味實用併博大喝采

◎空中飛行　機長十間余恰好よく鐵線にて自由に飛行裝置頗る極三巧妙中途に綱切れ一寸ヘーコー機

◎本校々歌　渴望するや久矣今回長野縣師範淺井剛先生の創作に成る可欣哉長の渴望長野より來も一奇

◎秋高肥馬　の候に入り霜月下旬旗鼓堂々小澤原に發火演習を擧行砲聲に驚者有其んな事てはと七笑

思ひだす木曾や四月の櫻かな

秋のくれ

冬の家

枯枝に鳥のとまりけり秋のくれ　芭蕉

秋の黃昏　一きは秋の花を咲かせ紅葉の散つて寂しい淵葉樹をこへて彼方遠く、打ちひらけたる野は夕の色と融け合つて居る

物遠く靜かなる影色の心もおのずから薄かに、寂しい〳〵秋の響が胸にせまる

伏すに仰ぐに皆愁ひを描き出し漂はしておる

今は天地盡く愁の國の樣に思はれる

折節、鳥が一羽、うるしの樣な黑い〳〵身を投ける樣に愁の枯枝にとまつた

鳥よ、晩つげては彼の山に金色の光りをあびし鳥よ夕暮、鎭守の森をにぎはしたる鳥よ、

かくて汝は寂しき我心をもなぐさめ人とはせざるか汝一羽が如何に天地の愁を增せしの事多きよ

と秋の暮の寂しさを玄みゝ〳〵と感じた

秋のくれの寂しさをいかんなく歌つてある

弓取りに歌とはれけり秋のくれ　蕉村

秋の夕　風は細く戰く、木の葉が音を立てゝ飜り飛ぶのを見れば、誰しも心は沈んで來る、自然の姿の我等の心を哀樂させるのは如何なる人の心も同じであろう歌は優しい、秋は優しい、歌心は秋の心である、

黃昏　天地は秋の愁を歌て居る、狩の歸途ならん荒々しき武者一人、計らざりき歌問はるゝとは、

あゝ秋よ、秋よ、秋の寂しさは、優しさはかくて此荒々しき武士にも歌心を起させしよ

秋のくれの感情さながら見るが樣だ

此句を吟さんだ時を思はせる

バイロン「チャイルド、ハロルド巡遊記」中の一句

あゝさらば、さらば—

我が故國の海岸は
悲々たる蒼海遙かに
夢の如くに薄れゆく
夜風は悲しく泣き
波浪は高く咆吼し
而して海鷗は哀聲を發す
我等は蒼溟の彼方に沈む
夕陽の跡に從ふなり
汝と彼には暫く袂を別たん
あゝ我が故郷—あゝさらば—

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

我が船よ、我は汝と共に
波浪を横ぎつて遠かに走らん
再び故國に歸らざるため
我は汝の何れの邦土に我を伴ふも意とせず
來れ、來れ、汝暗碧の波濤よ
而して汝、我が眼界を失せしとき
來れ—波沙漠と巖窟よ
あゝ我が故郷—あゝさらば—

森の家

冬生

むこうの
むこうの暗い森の中に
赤く
赤く灯が見へる
丁度雲の間から
赤い
赤い星一ツ
見へてる樣だ
あんな薄氣味惡い森の中に
一軒きり

よく年月をくらせたものだ
夜になつて—
あの恐ろしい川の流れや
森の響や
時鳥の血の聲をきいて
ねむるだろうか？
考へぬだろうか？
おゝ—
こゝに居てさへ
身がふるへものを

木曾山林學校の繪はがきに題して

安井正夫

忘みたてるひのささはらにおほはれてよにかくれたる
まなひやはこれ
遙　懷
かしらにはふる忘らゆきをいたたけとこころはるに
かはらさりけり

赤浦先生かこたひ帝室林野管理局詰を命せられ
御郷里なる東京へ歸られける別れに
木曾山のもみちのにしき身にまとひみやこに歸るきみ
をしうおもふ

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

○校庭の柳

スター住人

學びやの門の柳は枝たれて
學び子來よと打ち靡きつゝ

○岐蘇校友を讀みて

仝人

學び子に道を敎ふと藥草
書き集めても見する文かな

○

仝人

吳竹のかたき土をも破ること
おしつらぬけよ學ひ子の友

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

俳句

こんなもの

（十月寄稿せられたるもの）

季節酒落吟　フラッー冠者

△冷風一陣輕く面を吹きて明治四十二年の秋も立ちぬ

◎袂吹く風から立ちぬ今朝の秋

△木曾路の紅葉は信濃八景の一なり氣清き空を仰ぎては仙境の秋を偲ぶ事切なり

◎八重葎茂れる宿や秋の風

△鉄道工事の爲め名勝寢覺樓の地もあたら荒らされしと聞きて

◎鹿なくや木曾公の城址古りに鳧

△校友會報前號は何時になく頗る振ひじを出せり雜誌部員諸氏の編輯技倆眞に敬服に値す、年三回發行の意頗る壯とすべく其誠實稱せざるべからず、會報は一綾の精ある學窓の花なり、校友の聲なり、精なく聲なきの校門は死したるに等し、死したる校にいづくんぞ活きたる生徒を求むるを得んや是を發行し得ざりし時に於ける校友は一人として氣慨なく思想なく聲なかりしなり吾人は今回に及んで一層此の感を深ふせしを以て敢て露骨に云ふ、以前其局に當りし者にして年一回だも出し能はざりし無氣力者は顧みて大に愧ぢざるべからず、

城麓山人以下本年度雜志部員諸氏に吾人は厚く謝すると同時に今後倘豫定の會誌發行は期して信用ある鄉等の努に力に俟つあらんとす　―中身低蹈

◎夜長さや友は繁輕男哉

△東松露香今夏木曾に俳行脚す風流人の眼に映せし詩境の趣き如何に味ありしか、渠が紀行文に見て餘あり、

◎舟着ける堤に芒戰ぐかな

△聘傭せられて韓國學部所管公立普通學校本科教盤たりし元本校教諭百瀨重四郎先生事は去る八月六日午前一時、急性傷胃加答兒てふ無情の嵐の爲めにあたら咲きかけし花を無惨にも京城に於て吹き散らされたり、大望を負ふて遙々三韓の地に渡らせられしに何たる不幸の先生なるよ、裂けるが如き蠻聲を張り上げての覇氣ある彼の大氣焰を傾聽せし先を思ては、感懷の情千萬無量、哀涙滂沱として落つるを知らず

◎吹き折るや手頃の枝を野分哉

△先生の夫人繁子女史には先生の意を受けられて猶暫らく彼の地に滯在せられ愍ら追悼供養に從事せらるゝと聞く、……夫人の哀情推し量れば御互に同情の涙禁ず能はず

◎傷いて泣ける妻や露の萩

△七月卅一日午前四時半より八月一日正午迄に至る滿二日間に亘り大坂市に空前の大火あり市の四分の一は烏有に歸し燒失戸數一万數千死傷者頗る多く阿鼻叫喚の狀、眼も當てられざりしと被害民の窮狀を察すれば之れ又涙の種なり

◎絲薄半ば荒にし名所跡

△大阪未曾有の災厄に際し遙般の例ゑして同地木材市場の材價頗る暴騰せしを大坂大林區署は狹氣的好意を以て貯蓄しありし巨多の木材を所謂掴み賣り的に供給せしを以てさなきだに窮せる市民は佛前に於ける善男善女の如く有難がる事限り無く需要木材不足無く供給を仰ぎしと云ふ、他人の慘狀を他處に見て此時がらに暴利を博せんとせし幾多奸商の周章の狀、面喰ひし体、さても滑の稽からずや笑止々々

◎月の出て柿盗人の失せに鳧

△八月十四日、近江美濃に大地震あり、家屋潰壞死者を生せし之亦少からず此時に當り、森林原野を有せし地方は他所に比し被害甚だ僅少なりしと、林地は原より地盤堅く定まり居るなれば此事あるは些しも怪しむに足らざる事なれども、天上天下唯一の厄物たる地震に對し多少なりとも豫防の力あるは、森林の功要中に大書して可なるべく新に是を以て誇を一加はりしの感あり

◎秋の暮古寺荒れて風寒し

△校友會報前號中北米にある清澤巳衛君の說を近頃有益に拜聽したり、吾人も深く同感の意を表す、千里の外より遙々斯の如き痛快なる主張を寄せられたる如き君を吾人は敬せざらんと欲するも得ず、乞ふ健在なれ

◎初雁の列の美事や小春空

△櫻井忠君の訃を悼す

◎虫喞くや稍すれば泣く女哉

△寄宿生安藤次郎君二學期早々惡疫に冒されし旨、長野新聞紙上にて知る幸にも大事無かりしは慶すべし

◎秋行くや野に例れ臥す痩乞食

△我國代表的實業家と稱せらるゝ澁澤榮一外四十名米國聯合商業會議所の招持を受け、米國實業界視察の名を以て去る八月十九日溢るゝ郡衆の歡呼聲裡に横濱阜頭を去り爾後三ケ月の豫定を以て漫遊の途に上る

◎鈴虫や姫の御居間に移されつ

△一行九月一日シャトルに上陸以來至る所に熱誠なる歡迎を受け歡待應接に惱殺されて見るからに日猶足らざるが如し一行の得意や想ふべきなり

◎名月か雅人の宴こゝかしこ

△實業家一行は本邦に於ける商工業者の歴々を以て組織せられたり、實業なる熟語は所謂産業の義にして産業とは獨り商工業に限らずして農業林業も亦堂々たる産業なり農業(林業も含む)は本邦人口の大半を包容し年々十億圓の國富を産出し、吾邦に於て最も重要なる産業と稱せざるべからず、然るに見よ一行中には此重要なる産業家即ち農業家の代表的人物と覺ぼしき者影だに見へざるにあらずや、東京萬朝報記者、坂口氏は之を以て農民は除外されたるなりと云へり、或は然らん、識ある農民は須らく覺醒せざるべからず

◎宗匠の來て物たらぬ月連座

△中央西線坂下三留野間は七月中旬、同じく引續きて三留野野尻間は九月初旬何れも工事芽出度落成し溪谷の間汽笛の響を聞くに迫りしと云ふ、鹽尻、奈良井間は來る十一月には開通されんとし猶ほ殘餘の線に至つても刻々止みなく進捗しつゝあれば木曾全線の縱貫も察するに豫定以上ならん、文物進化の餘燼とは云へ、天下の險、一朝にして無双の樂園と化す、岐蘇とし云へば是迄は險峻なる山奥の殆んど代名詞の格なりき、云ふ勿れ廿世紀の木曾は廿世紀の東國の最善なるパーイとは變せしあり想へらく地下なる木曾公の靈は感慨あまりて必定泣かん、開花の世猫が自轉車で通るを見るも必ずしも遠き未來にはあらざるべし呵々

◎爐びらきや福々したる樂隱居

△世界一と稱せらるゝ富豪、米國鐵道王ハリマン去る九月中旬を以て宿痾腸加答兒にて沒す、一世の大實業家其經營所有する鐵道の總延長は實に吾が國有鐵道の十倍にして渠ハリマン一個の進退はよく全世界の財界を攪乱せしむるを得ると云ふ、大實業家の勢力も茲に至つては又偉の極、大の頂とも云ふべし歐米幾多の新聞紙は渠を稱して帝王以上の勢力なりと云へり、之或は眞に然らん、吾人は富豪崇拜者にはあらざるも、現世に(殊に本邦)有り振たる所謂門閥的親讓り的、凡俗富豪とは其類を異にし一世一代を自己一個の力に依て世界鐵道王と迄築き上げし眞の事業家に對しては內心稱せざらんと欲するも得ず、渠の死や獨り米國のみならず世界の爲めに寔に惜しむ彼の大統領タフトをして――――噫々ハリマン死せしか――と嘆せしめしも謂れなきにあらず

◎七草や寂しき色を競けり

△岡田本縣內務部長去る八月十八日本校敷地視察の爲め、福島に出張す、還定頗る難にして今に確たる報を耳にせざるは遺憾なり

◎難產の使ある夜や時雨降る

△十九世紀の末方頃より屢々歐米人に依つて企劃されたる北極探險は、科學の幼稚、準備の不足等ありて未だに誰一人として成功せる者無かりしに果然、八月初旬、米人クック博士なるもの北極發見の快報を貧らし世人の驚愕目の裡に又もや九月初旬是

も米人陸軍大佐ペアリー氏、首尾よく北極に到達せしと傳ふ、前者は歸來猶日浅く後者は未だ歸國せざるを以て其内容に至つては詳しくは知るを得ずと雖も、要するに該所に達せし丈は証據物さへ所持せしと云へば疑なきが如し、此の發見の功學界に提供する蓋し幾何なるか、千万年學者が疑惑の秘密庫は茲に如上兩者に依つて開かれたりと云べく今後兩人の互に公表する、探險談は刮目して俟つの價値あるなり

◎霧がくれ辛くも富士を見出しける

△現今世人の最も注目の焦點となり居れるは恐らく空中飛行機なるべし、試に六月以來の東京新聞を見よ其海外電報欄に於て一日たりとも飛行機上の記事の無き日としては無く然かも、日一日と其進歩發達を秩序的に傳ふるは趣味之より深きはなからん、先づ最初に獨國ツエッペリン伯成効し、引續て佛人ブレリオー米人ラクム等各自已が案出せる獨特飛行器を以て或は海峡横斷に或ひは、長時間飛行に失敗は失敗を重ねしコートはレコートを生みて遂に今日の成功を致せり

本邦人奈良原某又一の飛行機を案出す未だ試驗の上ならでは確たる成功の可否は斷ずべからざるも、何事にも、歐米人より後けを取る、本邦人にして兎も角も一個を案出せしと聞きては聊か意を强ふするに足る、飛行器全般に通じては未だ初時代たるを免れずと雖ども其完全なる成功を見るの期も決して永き後にあらざるべし人類の空中征伏想べば又快ならずや

◎秋晴れや人まで空を飛ぶ世なり

▲大日本山林會第廿回總會は十月九、十の兩日京都市に於て、又信濃山林會は十月五六の兩日北安大町に於て何れも開會せらる

◎名僧も今宵圓座の十夜哉

△兩會と引續き例の如く森林旅行を企つ、年と共に榮へ行く斯業の前途や祝すべし

◎われもかう蜀山人の散歩哉

雜錄

大澤村林業概略

特別會員　市川潔

本村は夙に模範として殊に造林事項を以て世に知らる余茲に當造林事業の概略を掲げ以て聊か會員諸君の參考に供せんと欲す、

第一　緒論

本村は南信久郡中西の一隅に位する小村にして、戸數二百五十戸、人口一千五百七十餘名、廣袤東西凡り二里南北二十餘丁耕地二百餘町にして他の大部は林地をなす、居民農を營み兼ねて養蠶蠶神の業を執る、産繭歳額三千石供給余りありて常に多少の輸出をなす、加ふるに蠶業上の收得年額四万圓に達し且一般華奢の風なく勤勞の習あるを以て經濟豐かにして貧富又均衡を得村内二百五十戸の内土地を有せざるもの僅に拾戸に過きず、故を以て賃納時に逢ふものなく就學兒童の如きも學齡兒童の全數なり、村内常に洋々和協の趣あつて絶えず嘯戀の聲を聞かず、

氣候盛暑は九十三四度に上り嚴寒の候十六七度に下る霜は至る事早くして十月下旬に初り春季八十八夜前後に終る、降雨屢々すれども層積平地は一尺を越ゆる事稀に山地幽陰の箇所は間々二三尺に達するものあり十一月下旬に初り三月下旬に至りて解く、冬季西北風頗る强し、村の南北に二丘あり南なるは村内字三枚平に起り北なるは字城山に起る二丘相距る僅に十數町並行し蜿蜒西奔し隣村前山村地續に至り遂に立科山麓に達す、延長共に二里に彊んとす丘の高さ南北聳等しく傾斜緩にして脚底より頂上に至る數町を出づるもの稀なり、南北相對して數多の脚趾を分派し各大小四十有餘の小澤を形成す丘の全部は則ち林地にして二丘各共頂邊を以て隣村と境を劃し内側相對して中間に耕地を作す耕地の中央を通じて一條の細流あり居川と稱す全村を縱貫して西より東に走り延長一里餘水量多からざるも四時涸れずして頗る灌漑に便す一條の流又南より來り村の東端耕地を潤し居川と合して千曲川に注ぐ之れ

を片貝川と呼ふ、

耕地の地質は暫く措く山地の地質を見るに重に沙質粘土よりなり地味肥沃に位するものゝ如し、地表粘土に富み地層淺きも尺を越へ深きは數尺に及ぶ、二三僅小の部面を除くの他は適度の濕氣を保有し土質の結合又硬脆の中を占む、故を以て處として樹木の適せざるなく樹木として暢育繁茂せざるはなし、

地勢前掲の如くなるを以て運搬の便は至る處に通し林抛遠きも道路を距る數町の外に出でず多くは車輛を其林地内一部に入るゝを待べし、本村は林業上地勢地質に於て天の惠賜を荷ふ事多大なり本村林業の今日の盛況を來せしもの畢竟各種原由に出づると雖も此天惠の至大なるは尤も與て力あり加ふるに地方商業の中心たる野澤臼田の兩市は眼前半里の地にあり利用上受くる所の便宜も亦實に鮮少ならざるなり、

第二　沿　革

本村林地は一の個人所有と三の公有との割合を以て成る公有林は總面積五百餘町歩其内落葉松最も多く檜栗之れに亞ぐ此内部分林五十八町歩餘學有林(國有借地)四十九町餘歩ありて他は地木共に公有に屬す、

今其年次を遡りて造林の由來を繹ぬるに當り先づ第一に擧ぐべきは明治十三年初めて村内竹久保に落葉松の造林をなし十町歩餘を完成す之れ本村造林の嚆矢にして永く紀念すべきものなり、是れより年を逐へ造林する事破竹の勢なり、

顧て造林以前の有樣を見るに廣大なる野面徒らに雜草灌木の繁茂に委して產出の更に見るべきなく僅にたゝ肥料秣の採取を以て滿足せり、然して其肥料秣を得んが爲めには年々火入をなすの要ありと信じ、下整頓なる設備の下に歲々火入を行ひしより其結果は地味の瘠惡を促すを悟るものあり、且つ薪炭は漸く缺乏の兆候を示し來り自然の要求よりするも造林の途に止むべからざるものあり、他面には則先人の德澤に出づる眼前鬱翠たる喬林の不言の間林業の功德を證明するあり、如斯各種の事情綜合し遂に起て造林の要を唱ふるに至り協同一致其植栽に勉めたり、

第三　現　今

年次植栽に怠りなく現今は春秋二季夫役と云つて村民(戶每一人づゝ)の承務として植栽する事となり若し何等かの都合にて出でざりし時は相當の賃錢を納むるものとす、而して夫役の植栽せし分は人夫を傭ふて植ゑさす、尙又十月より十二月迄三月より五月迄日每四人づゝ(之れも村民の業務)の山番を巡らせ野火盜伐等の難を避けん爲め巡視をなすものとせり、今當年迄に植栽せし樹種の本數及面積を示せば次の如し、

樹種	本數	面積
落葉松	七八三三六六	四、〇九二三一二七
扁柏	一二四三九六	四一五二〇六
杉	九四八〇〇	三一五六一〇
赤松	一七七七五〇	二七二二一五
花柏	一七九五〇	五九八一〇
黑松	一〇一〇〇	三三一二〇
合計	一二〇八三六二	五三五五九一八

備考　赤松黑松の本數の割に面積の少きは小苗木は沙地に密植せしによる

砂防工事並に砂防植栽に就て

(附住友別子鑛業所)

伊豫新居濱　緑山道人

諸氏若し神戸大阪若くは尾の道港より汽船に乘し新居濱阜頭に上陸せらるゝとせよ第一に吾人の耳目を驚かすものは住友家二百有餘年の經營にかゝる別子鑛業所なり然れとも我々をして慨察せしめんか規模廣大なる鑛業所よりも尙一層の注意を引くものあり曰く別子の禿山なり、

抑々此の別子の銅山は伊豫國　郡別子山村にあり四國山脈中高嶺の一にして海面を拔く事四千三百尺餘南は伊豫土佐の國境に接し北は燧灘に臨み海岸を距ること僅に五里に過きず、

別子鑛山の沿革、

即ち今を距る二百二十餘年前即ち元祿三年之れを發見し同四年四月鑛業を創始せり當時鑛山の北背に長谷坑と稱する一坑あり寛永年間より大阪屋某の稼業する所なりしが元祿八年に至り別子長谷の兩坑偶然貫通し始めて同一の鑛層を採掘するを知りしより熟議の末終に長谷を讓り受け爾後全く住友一家の經營するところとなれり、

爾來今日に至る二百有餘年間鑛業は益々隆盛に向ひ別子及ひ新居郡角野村字角石原に製煉所を設け主として「ストール」を用ひて鑛石の假燒を行ひ爰ねて鑛水收銅及ひ除害の作業をなしたり、即ち之れなん今日の別

予山約五百町歩が慘憺たる禿山となりしとは誠氏聞て一驚せざらんや（別子及ひ角石原にありし製煙所は現今總べて新居濱を距る海上四里の四坂嶋に移せり）

住友家も茲に見る處あり去る三十四五年の頃より砂防工事に着手したり先づ角石原の西方に當る一圓地に約三十町歩計りの柵工並芝工を施せしが急傾斜の地たるを以て何れも土砂崩壞に伴ひ瓦解し第一期の砂防工事は事不成功に終れり爾來今日に至る數星霜改良に改良を加へ現今にては大に見るべき者あり、下項を追て當地の砂防工事の有樣及び見聞せし者に付述べんとす

第一　當地に行はるゝ砂防工事の方法及種類

イ　芝　工

當地に於ける山地砂防の方法は先づ裸地に階段を切り之れに萱スヽキの類を植付るにあり此方法は緩傾斜の地には（土砂崩壞の少き場所）雜草の植付よく從て土砂崩壞を防止するの効力大なれとも急傾斜の地には此方法は不可能なり如何となれば植付けし雜草も土砂の崩壞頻繁なれば活着すること少なく且階段をきるに當り多量の土砂を堰落すべけれはなり、然して此階段をきるは最も熟練を要する事にて該事業に慣れたる人夫は目測を以て充分水平にきる事を得れとも不慣れの人夫は見角階段に高低を付けるを以て遠方より之れを望むときは至て見にくきものとす、斯る場合には監督者は豫め水準器の類を用ひて水平に見透を付け其の各見透点には鐵にて印を付け人夫には此の印を見當てに階段を切らしむるときは水平にきることを得るなり

ロ　柵　工

各種の砂防工事中比較的費用少くして且つ最も効果顯著なるものを柵工とす、柵工を設くるには芝工に於けるが如く先づ山腹に沿ふて階段を切り之れに杭を一尺若くは二三尺の間隔を置きて打込み之れに「サナ」を編付けるものとす、傾斜急にして土砂の崩壞激甚なる場所は階段と階段との距離を短くす當地方に行はるゝものは大抵八尺より十二三尺乃至二十尺に至るを普通とす、

當地方に行はるゝ方法は概樣以上の二法なれども川岸溪流等には各々夫々の設備をなすものとす現今我國に行はるゝ砂防工事の種類を摘記すれば次の如し

山地砂防工事の種類

其一　山腹土留工事　　イ　土留石垣工事

ロ　土留芝工事　　ハ　階段重芝工事

ニ　蓮束柵工事　　其二　小溪留工事

イ　溪間張芝工事　　イ　柳柵工事

其三　溪側留工事　　其四　溪留工事

ロ　石護岸工事　　其五　溪床固工事

イ　堰　堤　　ロ　蛇籠

イ　水叩箱枠

第二　砂防植栽

砂防植栽とは砂防工事施行後該地に苗木を植付るを云ふ勿論砂防工事を施すが如き土地は乾燥瘠惡の土地多きを以て普通の植栽と異る所多し、以下順次之を述べん

砂防植栽に用ふる樹種

一　山地砂防植栽に用ふる樹種

くろまつ、あかまつ、はげしばり、やまはんのき、はきすゝき、さくら、やまもゝ、やまならし、こならからまつ等

二　海岸砂防植栽に用ふる樹種

くろまつ、あきぐみ、はまぼうはひびやくしん、やなぎねむのき、かしわ等

以上列記せし樹種の内にて山地砂防植栽用として最も効あるものをはげしばり、とす

此樹は本名を、ひのやしやぶし（ハゲシバリ、ガケシバリ、ツチシバリ、ヤマシバリ、白山ミネバリ、ヤシヤ等の方言あり）と云ひ樺木科の落葉灌木にして暖温兩帶に生じ能く乾燥地に堪へ生長遠かにして枝葉を密生し且萠芽性強くして每株より二三本乃至十數本の芽を生じ且土地を被覆す又夏冬は枝葉地面を被ひて日蔭となるを以て地上常に温氣を帶び又秋季に至れば落葉して肥料となるを以て樹苗の生育良好にして冬間土地の凍結を防ぎ從て雜草を生ず、故に砂防工事に此樹と松とを混植するときは松のみを植へしものより成績頗る良好なりと云ふ又近來滋賀縣にては此樹のみ植ゆる方結果良好なりとて此樹のみ植栽することになせり、別子地方に於ても數年前より此樹と落葉松との混植をなせしが結果余り良好ならざりき之れ畢竟遠方より苗木を購入せしため勢ひ衰弱せし苗木を用ひしと植栽時期の遲れたるが爲めなりと云ふ

施業案編成員が出張地に於ける日常生活

由尾忠輔

我々施業案編成員が出張地に於ける日常生活の概略を

御照介致し併て當地方山岳の狀態を叙述致すーと思ひます、偖て我々の出張期日は其年に依り多少の相違を免かれざるも先づ初夏五六月の頃にして向ふ處は勿論山間避阪の地である宿所は大定の場合山間に點在する農家を撰定し餘義かき場合に限り山小屋に入るのであるが、處で當地方の農家の現狀は生活程度か低度なる丈け其れ丈け家の構造とか又は食物の調理とか即ち衣食住萬般の設備が不備不完全で其家を見れば之れが人の住居かと驚き、其の食物に接せんか之でも人の食物かと疑ふ事が多い實際始めての人などは奇異の感を懷くと共に寧ろ驚嘆の眼を見張るのである家の構造は冬季積雪期の長き爲に一般に陰鬱な建築法にして然も窓口少なく室内は常に薄暗く黑い煤煙けた壁、蜘蛛の巣の充ちた天井、之れ皆陰鬱の附屬物で着早々行李を解く前に一大清潔法を施行するのである、次は食物である當地方の常食は稗と米を五分五分の割合に混淆したるもので彼等は幼時よりの習慣上、境遇上、及び其仕事が精神的よりも寧ろ肉体的の勞働に有つて之を他の階級に比し比較的頭腦を使用する事少なき故營養分に低位なる野菜等を食つて尙綽々として餘裕ある次第である處で此樣な眞似を我々には非常なる苦痛である、何しろ冬の季六ヶ月の間じつとして椅子に寄り机に向ひて精神的の方面に勞いて居た者が急に廣漠の山野に飛び出して來る唯是れ丈けの生活の變化でも生理上に於て身体には大なる變調を來すのである、處へ以て來て何分仕事か激烈である雨天の外は毎日〳〵高山深澤を拔跋し小柴をくぐり懸崖を攀じ流汗淋漓し黑氣に成りて一日少なく其九時間以上の勞役に服し更に材積の算定に或は收獲の豫定造林の計劃等幾分の事務に頭腦を使用する故之か欠を補ふ爲には勢へ營養分の攝取を餘義なくせしめられるのであるが農家に於ける食物は此勞力の消費を補ふ可く餘りに不適當で遠慮なく例を擧ぐれば魚と云へば鹽鮭と乾鰯に限り他は悉く大根菜等の野菜に過きず卵の微發でも成效すれば大に鼻を蠢めかすのである農家の内儀さんも又定り切つた之だけの材料を調理して毎日の膳部を賑かにすると云ふのだから一通二通の料理法では用をなさぬ故に勢全一物質の連發を餘義なくせしめらるのである其から面白い事には僕等の方で飯が美味なりと云へば膳腕之れ悉く餅ならざるはなく大根か善いと逃べれば一日はをろか二日が三日でも嫌と云ふ迄續けられるのには一番閉口であるが然し又一方の見地よりすれば彼等が單純の思想飾氣なき氣質がよく現われて居て誠に面白い、話は傍へ外れたが何しろ前述せる激烈なる境遇の變化と從來より比較的低度なる生活に急轉したのと相俟て出張當時は隨分苦痛を感する事が多い然し此困難も追々時日を經過して其生活が習慣となると共に漸次消滅に近づくものなれ共又一方に於て大なる源因の潛むを認むるのである、其源因は何であるか即ち我々が四囲の風色である常に廣漠の山野に有て四時常に新鮮の空氣を呼吸し春は烟霞と燃ゆる百花朗らかなる雲鳥の囀に親しみ夏は綠濃たる鬱蒼たる樹林を逍遙し、秋は燃ゆるか如き紅葉の錦を仰ぎ塵界に超然と卓絶して友とするの之れ皆大自然の面影である故に心中何時も爽快の氣に充ちて程度を過ぎぬ活躍は衛生上常に好良の結果を生づるは當然の事に屬す、

さて愈〻題に入て出張地に於ける起床時間は春夏秋多少の遲速あるも先づ午前五時乃至五時半の日の出前后にして麗ら〻かなる旭光を拜して新鮮の空氣に体内の汚氣を吐出し狹霧立ち昇る淺流の岸に立ちて清烈極る溪水に面を拭ふ事數回忽ち一種爽快の氣五体全般に充滿し六根活如として躍るを覺ゆ、やがて彼處の麥畑を横り其處の叢生地を過ぎて暫し曉氣に肌を洒らしさて家に歸つて朝飯を喫するのである朝飯を終へれば今日の事業の豫定をなし基本圖を對照して大体に於ける地勢の配列を按じ之と昨日に於ける實地の觀察を併考して林班區劃若しくは小班測量の計劃を胸に納め作業服脚胖袴に身を固め測竿、間繩、測器、野帳、矢立、鉛筆、及び時計の七ツ道具を携帶して二人の人夫を引き連れ七時頃に出發愈事業地に向ふのである

茲で少し事業上の規定とも見るべき事項を一二記述して以て前文后章の連絡を保つ事としよー現今編成されつゝある施業案は簡易施業案に屬し一人一年の編成面積は約五千町歩なり然して一林班の平均面積は百五拾町歩標準にして一小班は地位地勢其他の關係により一町歩以上の箇處を測量する事に成て居る然して測量器は區劃主線及他の特別の線に限り經緯儀を用ひ他は悉くクリノメーターに依るので一日の測量功程は平均約一里である然して材積計算は初期拾年間の研伐豫定ケ處に依り標準地調査に依るものにして其方法は「ハルチッヒ」氏法に依りて直徑級は單級乃至三級となし針葉樹に有つては標準地面積一町歩以上闊葉樹に有つては一反歩以上である然して之より算出したる標準木は「フーベル」氏法に依り之を計算するも多くの場合標木

は之を樹幹折解に附し其生長量を算出し以て其地方に於ける林木の生育狀態を調査し併せて將來の生長量を推察し以て收獲豫定及輪伐期撰定等の資に供するである然して二期以下の林班に向つては比較調査即ち一種の目測調査に止めるのみなり又實行に際しての相互材積の相違は三割迄免諒される所である（詳細は森林家必携の全現定器質を願ふ）さて諸は前へ戻つて愈事業地に達すれば胸中の秘計を實現するにありて先づ「ポールマン」を前方に進めて測点を決定せしめ其点に對する磁針の指度と兩点間の距離を計り之を野帳に記載し若し高底あれば其度を記帳し準次如斯し点の位置を定め傍の附近林況の視察及び山川配置の狀態を目堵するのである然して測線の刈拂は事業の敏活を計る爲出來得る丈け之を省略し唯需要附近に限り他へ他測線連結の必要あるを慮かり簡單なる刈拂を施すのみにして測線全般に向つては之を行はざるを通例とする也故に未立木地及大溜等小柴少なき地の測量は易々として進行するも古き伐採跡地の小班界及峰通林班界の測量に際して時々非常なる苦痛に遭遇する事あり今當地方樹種配置狀況を述ぶる前に當つて暫らく筆を此小柴林に馳せ試に其概況を述べんか春は樹葉未だ發綻の期に有つて葉に依つて見通を妨害せらるゝ事比較的少なく時に高嶺大岳に至れば尚丈に餘る殘雪累々と堆積し爲に小柴笹類は之が下に屈伏されて前途何等の障壁なく坦として平地を往くが如し又秋季に於ては樹葉漸く紅葉の期に入り颯々の錦風一度訪なへば既に〳〵、枝を謝して所謂枯木山の景を現し見通の易々たることは春季に似たり獨り夏季に於ては然らず炎勢燒くが如き三伏の暑中に一度間隙なく繁茂する小柴笹原に身を投せんかむら〳〵と登る陽炎は殆んど腦神經の作用を變轉せんばかりに熱苦しく爲に眼光朦朧として視力鈍りぢり〳〵と宛然煎り付けらるゝが如き蟬の音は耳底に響きて身も聾せん許り流汗淋漓恰かも蒸の如く然も功程は意の如く進まず氣は焦せり心は急き口中は喝の極に達して然も喉を濕うす一滴の水だになく眞に生き乍の死獄に等し若し此苦しき境涯に入りて萬一翁鬱と繁る樹林に入りて木の間を縫ふ一陣の冷風に肌を寛げ更に浪々として盡きざる冷水の渓水を一掬以て頻喝の喉を濕さんか其味眞に美味の極み正に此の世の物とも思はれず感謝の極僅か一杯の清水は對し萬回の叩頭千金の價を拂ふも敢て辭せざる處なり次は當地方山岳の及狀態樹木の配置を述べんに由來山岳の通性として其山麓に近き部分は一般に緩斜若しく

は平坦にして漸次上方に走るに從ひ急斜となり嶮崖となり從て成育する林木も又上下各其種別を異にし所謂森林帶なるものを出現するものなり當地方に於ては山附麓近即ち俗に里山と稱する地域は伐木運搬上に於て少許の設備と短き時日を以て然も多量の木材を伐採搬出し得る便有るを以て古來幾度か伐採更新され現下に於ては其跡地には蘗芽に依つて成立したる、ナラ、トチ、等の雜木林を形成し其生育狀態好良なり此蘗芽の台木を調査するに其年齢の多少に依り自ら差異あるも普通四十年位にて伐採する者と假定すれば其一回伐採の台木は成績尤も良好にして須次回を重ぬるに從ひ成績不良となり、トチ、ナラ等に於ては三回伐採即ち百廿年位を限度とするものゝ如く杉其他の新植地も重に此附近の伐採跡地に行われ成績概して好良にして杉の如きは植付后三四年を經たるものは高き二尺乃至三尺に達し普通下草刈拂等の手入を要せざるに至る然して其被害の重なるものは野鼠の害にして次は寒風に酒されし凍傷木なり野鼠は其樹木の根部を嚙むものにして其害の及ぶ處蓋し意表に出づる事多し其驅除の必要なる一日も之を忽諸に附すべからざるを見るさて此里山を過ぐれば次第にブナの成育地域に屬し他の雜木は僅かに中腹以下にナラ、トチ、サハグルミ、を有し峯通にヒナシャウの幾部を混ずるを見るのみにして殆んどブナの純林と云ふを妨げず直徑尺に餘る長幹の美木亭々として繁茂し其蓄積殆んど無盡藏あり現に我々か編成に着手中の事業區の如き其面積より計算すれば全体の六拾プロセント又材積上より推せは約七拾プロセントの多量を占むるを見る以上其如何にブナの豊富なるか此に依て其一端を伺ふに足らんか然れども其供給殆んど無盡藏なる折角の美林も一方運搬不便の上流に位置し尚確然たる需用の途に欠乏するを以て伐採して之を市場に供給するも利益を計上する事頗る困難にして天與の豊庫も所謂寶の持腐に過ぎず自然のまゝに放任し唯僅かに比較的搬出の便に富む地に於て地元民の薪材に充用さるゝに過ぎず林業經營上誠に遺憾千萬の次第である然れ共今后工業の進歩と鑛山業の發展に伴ひ其れに要する用材薪材の需用增加するに隨ひ比較的價格の低廉なるブナの如きは眞先に之か供給に應ずべき却つて有望なる未來を持するの感あり、

此ブナ林も漸次上方に進んで縣界國界等の地點に達すれば風害其他の天災に罹り漸く林相荒敗の悲境に陥り樹下には笹其他の小柴厚く密生し測量の困難なる又前

日の談にあらざるなり、のみならず斯かる境涯は人跡未到の地其大部をしめ熊其他の野獸の棲息するもの多く之等獸類の足跡及び樹皮を剝て其甘汁を吸ひたるの跡殆んど隨所に之を見るのみならず、增して四國の風色は唯々幽邃の極みにして聞ゆるものは谷底に響く溪流の溪水の音と間々物凄き鳩の音樂あるのみ昨年の夏季の傾地は盛岡市の東北方に聳ゆる岩手山の續き通稱駒ケ岳と稱する海拔五千有餘尺の山谷に於て次の如き苦き經驗を嘗めたり、其日は山小屋入りの第一日目にして主線たる大澤の測量に從事したり時は正に午后四時測線の終點も指願の內に近づき希望に滿ちたる胸中は躍き滿身の勇を物して前方に進めば俄然澤を右方に曲節して然も其附近一帶雜草は何物にか蹂躙されて一面に散逸し何物かを踏るか如く一同不審の眉を顰めて靜かに前方を凝視ればこは如何に澤淵の凹處に眞黑なる一疋の大熊が温かなる中夏の日光を浴びて心地善き晝寢の夢を辿り居るの時なりき人夫は驚歎の餘りに「熊」!と叫歎の聲を發しぬ最早や躊躇する場合にあらざれば突差三拾六計の奧の手を出さんとするの時熊も我々の物音に驚きけんむく〳〵と体を起し恐ろしき一睨を余輩に浴せて疾風の如く傍の笹原に入りぬ我々はほつと一息眞に蘇生の思をなしぬ

話は非常に多岐に涉りたるもかゝる種々の界を經てやがて目的の地点に達し一日の豫定事業遺憾なく遂行さるゝ時は急ぎ下山の途に付き道路あれば其れに依り之れなき時は餘義なく溪流を下り傍內部林況の視察に勉むる也澤は一般に瀑布豐富にして奇岩怪石容赦なく羅列し眞白き溪水は其間を縫ふてやがて數丈の白糸を中谷に懸け或は紺碧の深淵の深淵を讃へ奇勝絕景行く處として之ならざるはなく都人士を案內せんがあつと驚歎の眼を見張る處頗る多し然れども仝時に又危嶮の地珍らしからず一歩踏み外づせば千仞の奈落に陷る絕壁あり寫にすがり岩角に足を支へて僅かに無事なる事を得るなり、さて終に於ける之等激烈の役務は勢空腹の媒介となり歸途は常に之が爲に惱まされ其歸宅の道の遠き事眞に通常の幾倍にか比せん、漸く家に着すれば鞋解く間も急かしく急ぎ風呂桶に飛び入りて汗に紛れし全身を拭ひやがて一家團欒當日に於ける大小の出來事等を談笑しつゝ樂しき夕飯の膳に向ふ此時に於ける一杯の飯一腕の汁は正に是れ金殿玉樓に於ける山海の珍味にも比すべく常に美味なり〳〵を繰り返へすあり食后は暫し滿腹の身を橫たへて樂しき親友の訪れに舊情を温め若しくは新聞紙雜誌の新記事に目を樂しましむるものなるが此親友よりの書簡程吾人に最安を與ふるものは恐らく他に之れなからんと思ふ、斯くして約一時間休息の后は再び身を起して新たなる精力に野帳の墨入日誌備役簿の記帳等をなし其もすめばやがて樂しき華胥の國に遊ぶので其時間は大底拾時頃である然し時としては明日に於ける事業の都合上餘儀なき製圖に夜を深して三更に及ぶ事もある故休后は一切の事物に浸交涉明朝迄にグッスリと寢通して其心持の善き事又別段の妙味あり明鳥の聲に目を覺まし又昨日の其の如く測量に側樹に營々として趨くなり、斯くして數日を經れば必らず雨天に遭遇する雨天には無論內業に從事するものにして幾日かの外業の結果を綜合して基本圖の調製生長量の算出其他報告書類の編成等萬般の事務は此間に決行さるゝのである、

肅々と降る雨滿の前樣鐘近く二三の机を並べて靜かに之等の事務に服する時は激しき外業に疲勞せし心身の慰安には此上なき供養となり平常排拆したる雨天も此時に限り大に歡迎さるゝのである、

次は山小屋の生活を御照介致す!山小屋は附近に適當の宿所なく某地よりは餘りに遠距離なりと云ふ時之を設立するものにして入山期は精々一ケ月短かきは拾日に充たざる事もあり故に經費時日等の關係上元より永久的完全の設備は之を施すに由なく唯丸太の堀立小屋を矢根も側壁も樹皮にて被い地上へ雜草を敷きつめ其上へ莚最上部に流球表を並べるのみなり然して小屋の中央に巾四尺位の爐を切り人は皆其四圍をめぐりて寢室も食堂も又事務室も總て此爐邊の一小城が之を兼ぬるので不便此上もない加ふるに上逸の如く床も製らず疊も敷かざる故濕氣の上昇夥しく街生上非常に有害なるは勿論痴脚氣等の嬉むべき病氣の因をなすのである仕事は農家滯在の時と略同一なれ共功程の進捗する事は前者の比にあらざるなり然して測量の歸途は勿論常に小鳥を得れば屋前の流に垂釣を試むるので之が乾燥無味の山小屋生活には唯一の慰安である、岸邊の石に腰打ちかけて呼吸を覺らして竿頭を見つむる時忽ち糸端びく〳〵と動いて銀色一尖潑剌の大魚竿先に躍る其瞬間は全身の血液一時に漂るを覺ゆ炊事一切は之を人夫に調理せしめ前記の魚類及春秋の蕨芹等は常に其一膳を補ふ資となる一日の仕事も滯りなく結了してやがて樂しき夕食終へれは一同爐邊を圍んで互に負け

と劣らじの快談絶語何時盡くべしとも果てず寢に就くのは大底午后の十時頃數枚の毛布に包まつてやがて夢路を辿るのであるが四開寂として萬籟聲なく六月の朧月天心に懸りうが淡き光を身を横たへながら山小屋の破窓に望む時は何時しか快談絶語の餘笑も冷めて一種慘慘の氣を生じ瞑目暫し過去を追ひ未來を想ひ或は思を故山に馳らし萬感胸に充ちて獨り暗涙に咽ぶ事もある、山小屋の禁物は雨天である何しろ臨時建築の堀立小屋なる故雨天となれば直ちに屋根の隙間より雨滴漏引し見る間に小屋の中は大洪水の見舞を受け蚤は飛び込むみゝずは葡込む蛇も來る之程氣持の惡い事は又とない皆々自已の荷物を片付けて青いき吐いき天を仰いで噴怒するのであるこんな小屋でも一日なりとも雨濕を凌ぐ假の宿なりしかと思へば別れに際して中々懷かしく篠胴容易に去るに忍ひないのである、さて斯かる生活の内に秋も去りやがて六花紛々山野に飄るの候となれば一年の外業を終へて愈歸署の途に就くので其期節は大低十一月下旬乃至十二月の上旬である、以上にて大体の模樣を叙述したれば一先づ之にて擱筆する我々の此生活を見れば實に簡單一律で六ヶ月の間唯山中に日を送るのは隨分倦きるだろうと思ふ人もあろーが元來施業案は其事業頗る多方面に關係し林業全般に渉つて居る故小開を利用して研究に從ふならは其材料は充分ある非常に面白く充分其目的を達する事が出來るだろーと思ふ

○兎害豫防の新法

（山林會報）

獨乙國森林官ドクトル、ボルクマン氏の報告獨乙殖民地森林事情中膠州灣に於ては獨乙國總督府の森林經營事項記載中に兎害豫防の實驗にて好結果を得たる一の新法を記せり其要領を抄譯して山林會報に記載せしものを左に掲ぐ

兎害防禦に就しは久しき期間の實驗に依りて一の良劑を發見せられたり從來行はれたる樹皮に豕脂を塗り或は石灰乳、牛血及石油の混合劑を塗付するか如き方法は確實なる効能あるものにあらす又專門の雜誌により稱揚せられたる「ワルド、ハイル」の方法も其効能は僅に二日以上を保續することなくして實際上は全く行はれず

茲に實驗を試みたるものは「カルボリニウム」及「サブロール」なり最初は此濃厚なる液を用ひたりしが實驗の結果に依り漸次之を稀薄ならしめ覓に「カルボリニウム」の一部と石灰乳の稀薄液三分を混合したるものゝ最も適當なることを確かめたり（獨乙國森林及狩獵雜誌一九〇八年三月分）

（注意）本文の「カルボリニウム」は獨乙國製の木材防腐劑として使用せらるゝものにして本邦に直輸入をなす淺邊商會（京橋區鍋屋町一）に就き問合はしたるに「カルボリニウム」に「カルボリニウム、アトラス」及「アベナリス、カルボリニウム」の二種あり其孰れが最も適當なるやは本報告中に記載なければ實驗上にあらざれば明ならず、

昨明治四十二年度第二學年生修學旅行記は本誌に之を掲載する豫定なりしも紙面の都合により掲載見合す諸君之を諒せよ

平湯紀行

木下稗藏

時は、これ深綠正に濃るが如く、暑さも一入酷げしき夏の暑中、余は暑中休暇、を利用して、白骨温泉を經て飛騨平湯温泉に、遊ばんと來るべき日を、今や遲しと待ちたり、茲に幸なるかな、同しき道を辿るなる友兩名を得て心、大いに勇み、喜ばしき事限なし、愈々閉校式も終り明日よりは、自由の身体となりたれば、二君と共に打ち喜び、互に用意怠りなく、明朝を期して各々床に入りぬ、余、身は床に横われども、遊心早くも別天地に向つて飛び萬感交々、胸中に湧き出でゝ、眠りに就く事叶はず、さなくとも、蒸苦しき、夏の夜の臥床の上に、打ち悶へて、幾度となく、寢返りする中に、時は、いつしか過り來つて、二時半を報するに直に、床をはねのけ、豫て用意の旅裝に身を固めつゝ有る折しも、二君は早くも、誘ひ來り茲に何れも、用意とゝのひて未だ夜も明け放れず、人の顏も朧に、木枝に眠れる小鳥の、人の足音に驚き、電燈の光りも次

第に細り行く朝まだき、狎れし福嶋町を後に喜々雀躍として出發せり、時正に午前三時、

行く行く、談笑斷ゆる時なく、宮の越に至る頃、東天僅に明るく、曉の空の色麗しく打ち霽れて、曉風おもむろに、面をかすめ、其心地得も言はれず、思はず曉風面を吹いて、〻、〻、〻と、口すさましむるもの何ぞ、藪原に至るや東雲の空、いやが上に赤く、赫々たる光線は、高き山々の頂を輝して、遠く鷄鳴を聞く、道を小木曾街道に取る、進むに從つて、愈々狹隘なり、さしも、名高き木曾川も次第次第に細り來ぬ、

太陽は高く吾等の頭上に擺きて、暑き事此上なし路傍の樹陰に憩ふ事數回、山又山は、愈々狹り來つて、家路に歸る里の子の口笛の音も、遠く響く境峠に差しかゝれば、幾百年を經たるか、知る由もなき、天然の美林、鬱蒼として茂り、實に木祖村の名に違はず、行く程に足漸く疲れを覺へ、彼處の樹陰、此處の岩陰に身を休め、蘇川の源なる、瓊々たる谷の水を掬して渴を醫やし、互に相勵まして登る程に、瀏々たる高原に出でぬ、蓬蒿の茫々たる所、僅に小徑を通ずるもの甚だ遠し、茲に於てか空腹を來し足又更に重きを覺ゆ、漸くにして、と有る峠茶屋に達す、皆々喜ぶ事限りなく、直に食を命じて腹を造る、時に午前十時廿分、岩魚の味殊に美なり、茶店の老翁に道問へば白骨まで五里、島々まで六里半なりと云ふ、

各自天氣恢復して、先に弱き音吐たる、Y君の如き出發を促すにさらばと此處を立ち出で十二三丁にして頂上に達し、其れより降坂となれば、足の疲るゝも知らで、四方の景色に心奪はれ、知らずしらず、麓近くに至る、此處木祖村とは、限界一變して、山又山は悉く、木なく唯僅に雜草の蓬々たるのみ、所々に赭色慄凄たる、禿山を見受けぬ、嗚呼何すれば、斯くは荒廢せるの甚だしき、と思わず嘆聲をもらさしむるもの多、

時、漸くにして、寄合渡に着す、茲に飛驒に通ずる所謂野道街道に合す、

黒河渡、松竹、德佐平等を經て、奈川渡と云ふに達す茲にY君に分るゝの止むなきに至りぬ、君は島々へ行くべくわざわざ、余等と共に道を同しくせしもの、君の爲めに便を得たる事多々、つきぬ名殘を惜しみつゝ遂に釉を分ち、君は右に、余とM君とは、左に白骨さして歩を進む、道路漸く險惡にして、且つ今や拾二三里を歩みたる我々なれば、身体殊に疲れ、M君と共に語るべき勇氣も失せ、無言のまゝに、溪流に繰りて消りと有る茶店に立ち寄り、白骨までの道問へば、二里余なりと云ふに、最早此處にて、宿らんかと、思ひしかど、日尚高ければ、行けざる事や有ると云ふ、店の媼の言の葉に、僅に力を得て白骨まで達せんものと、疲れし足を引きつゝ、岩角樹根を攀躋して進むに、道愈々崎嶇たり、此道は昨年出來たる林道にして、大野川へ廻るよりは近しと云ふ、向ふの樹蔭僅に明きを見ては最早近しと歩を進むれば、道は彼方に曲入するもの數個恰も暴風の中腹を過ぎるが如く然り、其度毎に落膽すること殊に甚だしく、今暫くと云ふを、力に辿り辿りて漸くにして、待ちに待ちたる白骨温泉に着す、時に午後六時五十分、

山々は暮雲棚引きて、夜の幕は次第次第に、とざゝれたり、足甚だしく疲れて痛を覺へ、宿の楷段の昇降にさへ心を惱ます計りなり、本日の行程十六里、聞くものの驚かざるなし、

明くれば八月二日午前六時輕からざる足を引きつゝ後日を期してM君に別を告げ、白骨を跡に山路に向ふ、白骨より登ること數丁、少傾斜をなせる、燒畑の間を通ずる道に出す、作れるもの蕎麥ならざるなし、此あたり「シラカバ」「ハンノキ」の類多く、中林をなせりと見る正面遥に白煙の朦々たるを、云はずもあれ、名にしあうたる、燒ケ岳其の壯觀筆舌の及ぶ所にあらず此道は乘鞍岳及び安房岳の間に位する、連山の中腹を縫ひ、行くに從つて、愈々險に愈々危に、或は突兀たる岩角幾度が足を傷け或は蟠屈せる樹根に、足を取らるゝ事、數知らず遙の下には、滔々たる川瀨の響きいと物凄く、老鶯樂しけに、囀くさへ身にしみて深山路を一人とぼとぼ辿り行く、身のさびしさを增す計りなり、

深山路や青葉の陰の古鞋

燒ケ岳は進むに從ひて、漸く近く名も知らぬ、大樹の雲を凌ぎて、林立するあたりに、隱見して僅に心をなぐさめつ

ちらちらと見ゆる煙や夏木立

此處自然の淘汰によりて、町余の間山崩壞して、赭色慄然たる所、巨岩大石千尋の谷に落ち道斷へたり、一時はいたく行き惱みつゝ、僅に人の通りたらん如き跡を辿りて行くに、足をかけたる石、余の力にて動き谷低目掛けて、落ち行く樣恐ろしく、岩又岩に衝突する毎に、こだまに響きて、幾度か耳を打ち、余りのこわさに、我を忘れて通り過ぎ、觀る勇氣も出でざりき、

此あたり、總て自然の林にして去年のまゝなる、山蕃枯れ果てながら纏りたる、雪の爲めか將た風の爲めかは、知らねども尺余の大木、此處彼處に横わる者珍しからず、立木の幹はいやが上に苔むして、古色蒼然たり、之れにからまる藤の蔓は大蛇の如く、委見へねど羽音高く藤木の間を經ふて飛び行く小鳥にも、我知らず膽を冷やし愕然たる事、あまた度物凄き事言はん方なし、

行く程に、信濃と飛驒の境近くに至れば、燒岳は右方指呼の間に現われ、山頂の岳松煙の爲めに、赤く枯れ太き白煙噴出するあたり、白灰色をなせる、岩石疊々たる等手に取る如くに見ゆ數百年を經たる大木は天空を凌ぎて、林立し道の兩側は丈余の熊笹錯綜して繁茂せる深山路漸くにして、飛驒の地に入れば、道僅に廣く降り坂となり、上賀村銀山官林境界標の立てる所に至れば岩石疊重たる所「ツガ」「トーヒ」「シラベ」等鬱々たるありて甚だ奇觀なり、斯かる景をして、都會の中央に持ち行かば、、、、、と、思わしむ足にまかして、下る事里余、午前十一時になんなんとする頃、平湯温泉に着きぬ、此間山路四里、日は頭上に耀きて、暑さ殊に甚だし宿の二階に疲れし身体を横へて、過ぎ來し方を思ひ出せば、嗚呼我れながら大膽なる限りあれと、今更恐ろしくも又喜ばしく、おもむろに筆とりて此れを、ものしつ、

（八月二日稿）

（終り）

青年は一國の元氣である、青年の隋落は一鄕一國の滅亡する兆である、校友の隋落は校風衰頽の基である、惡風潮は都より發して逐次田舍に浸入し來たらんとす、近來青年學生の隋落の底に沈み社會より非難せらるゝ又多きを加へ來たる、吾人大いに其の身邊を警戒せさる可らす、

若し夫れ其の浸入を防ぐ事能はさらんか、校風の宣揚は勿論遂に之に感染し、果ては奈落の底に沈淪し再び浮く機を得さるべし、嗚呼斯くの如きか吾人誠に寒心に堪えさる次第である、

玉磨かすば光添はさるが如く、人も亦生れながらにして偉人傑士たること能はす、古來如何なる偉物と雖も、之れ皆修養の賜物である、

青年隋落の誘引は女と酒である、然かるに何故に此の危難に好んで近付くか、之れ人間の弱点たる本能が強い爲め理性を沒却するに外ならぬのである、

吾等は常に猛省して、品性の修養を務め以て之れに溺れさらん事を期せさる可らす、如何に學識豐富なる人も人格ゼロなるあらば却て社會或は學校を毒することなきにしもあらす、彼の聖賢と云はるゝ孔子ですら日に三度身を省みたと云ふ、況して凡人たる吾人、常に之れを怠らさる事寧ろ當然の事であろう、聊か蕪辭を陳して諸君の一考を煩はさん、

（麓の家）

雜書便り

○嚴手縣

廣瀨靜之進君より

謹啓殘暑之候折柄校長閣下、諸先生始め吾が校友諸君に付益々御壯健之御事と遙察奉欣賀候小子幸に無事勤務罷在候間乍他事御放念下され度く候

扨て客月御郵送下され候校友會雜誌第十號は慥に落手仕り候思ふに卒業生は諸雜誌に依りて校友の消息を知るのみならず之れに依りて得る知識は實に偉大のものと存じ候生は原稿を出さざるも定期發刊の時期來るときは其欣興を待ち居り候先輩者諸氏も亦然あらん余は益々全會の發展と吾校友諸士の御壯健とを祈る

○北安曇郡常盤村

太田清松君より

謹啓仕り候時正に秋冷の候に向はんとする際なつかしき諸先生方を初め奉り健兒なる我が山林學校諸兄が本邦の富利を增進せん爲否な世界の幸福を計らんが爲め日夜尊き林學の御研究に餘念もあらせられぬ御事と存じ不生等の希望と喜びに堪わざる處にて御座候下て私事御校に御敎を仰ぎなつかしき膝下を退して以來多忙に取りまぎれ御通信も仕らず誠に申し譯け之れなく候去月身体衰弱の爲め米土を發し歸國仕り只今自宅に保養まかりあり候間御安心下され度く願上候

國の内外に論なく或は御校の校舍新築とか或は山林學校の必要とかを見聞する毎に一增御校の盛大有力の一校たらんを希望仕り居り候甚だ恐れ入り候へ共生等卒業後の御校友會雜誌の内樣を知り申し度く候へども近鄕より御出校せる友人諸兄も既に卒業せられて此の近きにあらねば何卒生等卒業以後御發行に相成り候御校

友會雜誌御惠送下され度一重に御願申上候少々の金には候へども相送り候間何卒校友會費の内へ御納めおき下され度願上候

○韓國咸鏡南道甲山郡

統監府營林廠惠山鎮支廠

林與五郎君より

新緑人を戀ふて夏正に來る校友諸賢益々御勇健以て斯道御精勵之段奉大賀候愚生儀爾來久しく打ち絶えての御無音今更何等申譯無之次第何卒特別の思召を以て御免容の程伏して願上候

今回校友會報第九號御送呈に預り恰も絶えて久しき竹馬の友と偶然異境に相見し心地胸は波打ち手に震ふと云ふ有樣にて反覆拜讀仕り候校友諸君が地方に母校に益々校名を發揮しての御活動快哉の至りに奉存候、愚輩母校を辞してより虎捕むちう北韓の山深く分け入りて親しく手斧愚師の元に御教導を受けつゝありしも天なるかな宏量海の如くして内剛毅正直吾人が慈父と敬愛する先生すら多大の希望も空しく鴨綠江畔一朝の露と失せられ悲事此上もなき次第嗚呼神も宇測には神信なるまじと今更の如く人世の無常を感じつゝも茲一年余今歳百花將に笑はんとするに際して相提携の學兄柳澤君は北韓會寧に轉じ鶴殿杉本兩君は事情止み難きありて歸國せられ今や雲漠々たる韓山の荒野に獨り淋しく彷徨するの身とは相成申候只幸にして身体の健あるのみ乞ふ先輩諸士御見捨なく御指導の程を

渡韓以來絶えて久しき御無音の御詫旁々當鴨綠江森林事業の狀況や其他精しく御報可申等ながら目今多忙に迫られ居り殊に愚生は森林調査係として鴨綠江流域奥深く調査の任を帶び數日を出ずして出發の豫定と相成り候間今度は御報道申兼ね候に付き不惡御承認下され度先づは一寸生きて居ると云ふ御知せ迄乍末筆諸先生初め校友諸君の御健康祈上候早々

（六月十五日）

○岩手縣稗貫郡湯口村

大字豐澤字柱澤金山事務所

由尾忠輔君より

拜啓時下中夏の候に候處校友各位益々御清祥の段奉賀候小生今回當地に出張被命無事勤務罷在候間御放神被下度候本年赴任致し候鹽澤君とは山一重を隔てたるのみ會合の期も有之事と持居候分擔面積を三名の人員にて約一萬八千町歩にて中々重荷に候一木君とも出張の途面會致し候此頃追々事務に修練致し無事勤務致し居り候間御休神下され度く候草々

（六月廿二日）

岡田彌兵衛君より

謹啓其後は久々御無音に打ち過ぎ候段偏に御容赦の程願上候諸先生如何御消光遊はされ候哉伺上候降て小生儀今回表記之個所へ轉勤致し候間御承知下され度く候當所は本年度新設事業にして伐採面積は四十町の皆伐に之れ在り候而して材積は二万尺〆余樹種はヒノキ、サハラ、カウヤマキ、アスナロ、モミ、ツガ、ヒメコマツ、クリ、ホゝノキ、カツラ等にてヒノキは六割サハラ一割カウヤマキ一割アスナロ一割其他各種にて一割に有之候、就ては四十一年度四十二年度分校友會費金五十錢及前本校教諭米山先生の記念寄贈品代として金壹圓合計壹圓五拾錢本日郵便小爲替を以て御送附申し上候間御領收相成度候早々敬具

（六月廿日）

○豐橋騎兵第一九ノ一ノ四

下畑德十君より

拜啓炎熱燒くが如く酷暑堪へ難く候處各位益々御健勝に渡らせられ候段大慶之至りと存じ賀し奉り候尚去る七月末には會報第十號御惠送被下難有く存じ候何時も乍ら研究部各位の御勵精により内容の趣味森々たる殊に其改題に因て得たる雜誌の体裁の程の良さは一入と我母校の進歩の程を現し得て妙と存じ申候而して其内容の程も回一回と改良致され吾人の舞台としてこの葉書便り心うれしくと存じ候去り乍ら其淋しきは吾人の罪の程と存じ申候次后吾人奮て賑さん覺悟に之れあり候亦小生も其後は相變らず無情の月を有情を眺めつゝ高師原を東西と駈け廻り其日其日の任務を盡し居り申し候此二旬が間は暑さは殊に激しく室内にても寡暇計は九十三四度を示し居り候へば屋外は百二三十度の事と存申し候目下吾人の生居の起床は四時と云ふ未だ全く渡らで星が晃々して居る頃より夜は九時消燈と云ふ有樣にて失れて夜間勤務は四日に一回宛であるが新兵時代とは事變り万事面白可笑しく有之候

亦去る七月十七日には當地に騎兵旅團（第十九乙）第二十五（甲）より編成致され候に付き師團長閣下より團兵分列式執行せられ爾邊閣下指揮の下に師團長閣下の觀兵式あり又去る廿八日廿九日出日は第二期示檢執行され殊に去る廿九日より出日に至る間は高師村に於て露營仕り候斯くの如く寢具を共にする度毎

に愛馬の念は高まり來り申し候馬は吾人騎兵たるもの活動武器たる物は馬と云ふ生物なる丈吾人は興味も有之候馬も軍隊の馬でも地方の馬でも人に愛せらるゝ程人を便にかの如く感ぜられ申し候

次に吾人の先輩として四期に入營せし見野榮兄には去る六月中に韓國守備隊として出發仕り目下第三大隊第六中隊に勤務致し居られ申し候亦安藤孝一郎兄には去る七月一日を以て騎兵第廿五聯隊に轉出仕り候亦木村川崎兩兄には豫備見習士官として歩兵第十八聯隊に之れあり候小生も何か有益なることをと存じ居り候へども何分余暇もなく毎日毎日其日の仕事に追はれ居り申し候一は何卒御容赦の程偏に祈り上げ候各位の御健勝なる事を祈る余は后便を以て申上ぐ可く候敬具

（八月六日）

○嶋根縣簸川郡役所

遠藤治一郎君より

酷暑の砌各位益々御清榮奉賀候扨而小生今般當簸川郡役所へ齋藤正雄君の後任として赴任致し候間次後御文通表記の處に奉願候先は不取敢御一報まで

（八月七日）

石川縣羽咋郡加茂村

寺尾敬二君より

拜啓三伏の候貴會益々御隆盛の段奉慶賀候、岐蘇學友正に拜受仕り候、昨戊申の曉秋除隊以來故山の人と相成申候、去月中旬恩師三村農科大學助教授稚堂松茸栽培法講習の爲め御來縣遊はされ久々にて温顏に接するを得申し候　目下本縣摸範林業場に於て研鑽琢磨いたし居り候來る九月一日よりは豫備見習士官として再び金城師團へ入隊仕るべく候草々

追て雜誌代廿五錢小爲替にて御送附申　上候、履歴書は別紙の通り御送附申上候

（八月八日）

○青森大林區盛岡小林區署

赤岩藤太郎君より

謹啓計らずも出張先なる山奥に於て發展と共に大改革なされ最も光輝ある岐蘇校友會報に接し欣喜措く能はず夜を徹し拜見仕り候段深く奉感謝候

其後は乍不本意御疎音に打ち過ぎ誠に申譯無之候、私事六月中旬より例年の如く施業案編成の爲め表記の小林區部内岩手山を始めとし秋田縣界に至る深山を一行四人にて編成を被命日々外業に從事致し居り候、岩手山は海拔六千有余尺の高山にして往時火山なれば頂上一面噴出岩石のみにして草木などは更になく實に裸々たるものにて候

然れ共中腹に至る時は一帶濶葉樹生立し次て林業を滿足せしむ可く又山麓即ち當山の麓裾は廣莫たる一大平原にして國有林も此一部を占め赤松落葉松の造林したるあれと其外は小岩井農場（南方）及び陸軍省（東方）の牧場に候、絶頂に至りし時是等の廣原を始め四圍の峯巒等眺望する快や實に筆紙に盡し難し岩手山より西方秋田縣界に走る連峯より泉出する大小の支流は左右より集合し葛根田川と相成り候、（北上川上流の一部）此葛根川には有名なる鳥越の瀧及び黑瀧其他數十余の瀑布あり各々其趣きを異にし飛瀧湧霧の樣實に壯絶快絶に候

斯かる自然の秀美なると何よりの樂友とし外業に從事するもいと面白く候のみならず、外業首尾能く完了の曉は將來理想とする林業を營む基礎と相成り候へば連日の疲勞も打ち忘れ專心勉勵致し居る次第に候へは乍他事御安心被下度候

尙ほ目下の個所は八月中には終り致す可く候へば其後は同一小林區部内柴波郡内に移轉の豫定にて確然たる住所も無之候へば御照會等の事項有之候節は青森大林區署宛に願上候

終りに諸先生を始め諸彦の御健康を祈り奉る敬具

（八月十日）

秋田縣白澤小林區署

高橋金作君より

炎熱燒くか如き今日頃如何御暮し遊はされ候や私事恙なく其日其日を送り居り候間憚かから御安神下され度候

過日は御盡力の校友會報御送附下され有難く拜見致し候早速御送金致すべきの處口座番號不詳の爲め今猶失禮致し居り候御手數恐れ入り候へ共御一報下され度願上候

（八月十四日）

○松本市堂町五二〇

肥後金四郎君より

拜啓爾來打ち絶へて御無音仕り何とも申譯御座なく候今や殘熱却て凌き難く恰も燒くが如く蒸さるゝか如く殆んど身を措くに所なからんとする有樣に候へ共諸先生閣下を始め校友會員諸兄には益々御壯健にて御精勵の御事と上なき喜びに奉存候、降而小生事も無事勤務

麗在り候故乍憚御放念被下度候扨て過日は校友會報御送附被下有難く受領仕り候

嗚呼回顧すれば恩惠深き母校を辞してより最早二年有余此間業に諸先生閣下の御厚恩を偲び校友諸氏の厚き友情を想起せざる時とては候はじ、然れ共情弱勝の小生なれば自然御無音に流るゝ次第にて校友會員をしても亦面目なき有様に有之候されと其が微意の存する處を御凉察被下候はゞ幸甚に御座候、次に在校諸兄には今尚暑中休暇として其戀しき懐しき故郷に各々其境遇事情に從ひて或は轉地に或は林業視察を目的として旅行に登山に或は又其の温きホームにありて農事の助として日の未で雲の会の中の眠より醒めやらぬ其間に床を蹴て起き出で鍬を肩にて清い凉しい風に面を拂はせ田の畔の草の露を踏みながら水廻りに出かくるもの心を渓流に澄し眼を青山に樂ましめ凉風を浴びつゝ秣苅るなどに詩的否勤勉家も候はん

露うすく青葉茂れる村にすれ
　草苅るわらべ有明の月

斯くして諸兄は此の炎暑を最も有利に最も多趣味に鎖夏せられ以て來るべき新學期の大活動に資せらるべきエチルギーを御貯へ中の御事と存じ候

嗚呼諸君今の時代は暢氣なり靜穩なり平和なり然れ共亦前途に向つて一考を巡らさば大反省すべきの時に候即ち諸兄が母校を離れて社會の活舞臺に動くの其時を豫想して修養せざる可からず然して事實に於ては其豫想以上に種々なる困難辛苦は襲ひ來るものに候或は實務上に或は社交上に而して此活舞臺なるものは靈的方面より際する時は惡魔の演劇場に有之候從つて此活動會に出つるには總べての惡魔と戰ふ決心こそ必要に候兄等は今より其覺悟を以て修養せられ他日國民時代の到來するあらば、いざ御座んなれ待ち兼ねたりとも云ふべき元氣あらん事を切望するものに御座候

先は以亂筆暑中御伺ひ旁會報の御禮までに候乍末筆諸先生閣下を始め校友會員諸兄の御健勝を祈る

（八月十五日）

○日向國西諸縣郡小林區署

出張なる　古根是君より

拝啓回顧すれば明治三十七年母校を第一回に生れ出て諸先生の御盡力によりて當署に赴任致してより早や六ケ年を算するに未だ一次だも會報誌上にて諸兄に見ゆる事も無く懐しき會員諸賢の動靜に接する毎に當地の狀況も御紹介致さんと思ひながら今日迄も御無音に打過し居候ところ岐蘇校友第拾號御送付被下母校並に會員諸君の御消息に接しうれしく早速拜見仕候御禮旁々左に赴任以來の概略御通知申上候

今後は當署部内有名なる屋久杉及飫肥杉に付き時には通信仕る考に候へば今日迄の御無音平に御海容下され度願上候、扨て卅七年六月當署に赴任屋を命せられ造林係に產物販賣係及利用係に勤務致居候ところ卅九年八月森林主事に任せられ月俸拾五圓下賜仝年十月鹿兒嶋小林區第一號谷山保護區官舍詰被命候

鹿兒島小林區署は軍馬補充部の跡にて構内に三町歩余の樟樹樅篭苗圃有之小生說明員を被命重に苗圃事業に從事致し居り候が四十年九月山林技手に任せられ鹿兒島小林區本署在勤中四十一年三月月俸拾七圓に昇給仝年六月本署詰特別經營課勤務と相成り仝七月施業案編成御用にて日抄宮崎小林區署部内より有名なる飫地杉の產地飫肥小林區部内に出張致し居り本年二月飯署六月九給俸に昇給仝御用のため去月卅一日出發下表記の處に出張中に有之候本年は出張豫定日數二百拾日間當部内を了へ大隅國内之浦小林區部内に移り來春二月下旬飯署の豫定に有之候又同窓の坪倉藤三郎君は敏腕の聞え高く其後山林技手に任せられ川内小林區本署勤務のところ客年末又岩久宗治君は森林主事に任せれ福嶋小林區署在勤のところ本年六月何れも沖繩縣廳へ御榮轉目下當署部内には鹿兒島小林區本署勤務山林技手征矢野克己君と小生の二名に有之候、先は右御知らせまで　末筆ながら諸先生方會員諸兄の健康を祈り上候頓首

追て校友會報代金として金五拾錢小爲替を以て送金仕候間御査收下され度願上候

（八月二十日）

○群馬縣利根郡足尾鑛業所

利根出張所　山下藤一君より

拝啓日頃の御無音誠に申譯御座なく候扨て生等の思師百瀬先生には韓國京畿道漣洲普通學校に於て專ら御教育なされ候處僅か二日間斗り御病床に御在し給へしが藥石其功なく去ぬる六日午後一時御在韓未だ幾才ならずして遂ひ此の世を去り給ひし由在韓なる百瀬さげ子様より御通知に接し申候間取急ぎ御通信申上げ候也

（八月二十六日）

○熊本大林區署内

一之瀬製袋藤君より

謹啓時下初秋の候とは相成候暑夏の時節はいつしか過

ぎ秋はたに覺ゆるの時は來り申し候校友諸氏皆御壯健にて學務に御勉勵の時と御推察申し上候降て小生は去る三月校友諸氏と別てより本月上旬迄自宅にあり一意專心實業に從事し居り候えしが昨日當署に出頭業務課、作業係を被命致候日々相變らず健全にて勤務致居候何れ近日中に官行伐木事業所詰と相成り當分出張の都合に有之候諸先生には宜しく御傳言被下度又當地は氣候御地などとは大差あり吾々の如き信州の寒國に住みし者は甚だ暮しにくゝて困難を極め申し候何れ詳細なる事は折を見て御報知致すべく候先は御通知迄余は後便に讓る頓首

（九月十五日）

○北海道釧路營林區署

岡戸廣治君より

前略仰に依別紙履歴書一通御送付申上候早速御送付申上ぐ可きの所天然更新事業實行の爲山寒僻地に出張罷在候爲め遂ひ遲滯し申譯御座無く候當營林區署管内本年度天然更新事業（傘伐更新）は「エゾマツ」「トヽマツ」三箇所此面積壹千貳百町歩「ヤマナラシ」一ヶ所（皆伐作業）此の面積四百町歩に有之候右用事旁々早々

（九月十六日）

○秋田縣廳農務課

藤原周紫君より

肅啓益々秋容清爽の候と相成り候處師の君方初め校友諸氏に於かれては愈々御清穩の御事と賀奉り候野生義爾來東奔西走遑々疎遠に打過ぎ候條御諒承相成り度候降て野生儀も當秋田縣へ赴任以來已に二星霜を經過致し縣下一般の林業施設經營方法或は諸種副産物製造採集の狀況並に森林利用狀態等概略は視察仕り候得共りは全く表面上の一微に有之今後研究開發を圖るべきもの多々有之目下夫々縣に於いて而も極力調査中に有之候定めて新聞紙上にて御承知の通り頃來東北開發策を講せらるゝ者頻々として止まず、先に遞信、司法、農商務、諸大臣の視察せらるゝ有り今又農商務次官を送り東都新聞雜誌記者の遊覽團を送り國民新聞主催遊覽團を迎ふる等踵をついて來り去り應接に追あらず候由之從來東北の雪中に眠れる秋田も正に覺醒の期に入らんと致し居り候斯の如く他縣人の刺擊を受け未開發諸事業の有利に經營せらるゝに及んで初めて眞箇縣民の興奮を見るべく候こは獨り秋田發展上のみならず全々縣國の利福ならんと存候顧て當秋田縣を見んか眞實所謂遺利なる者の多種多樣なるに驚かずんば有る可からず

候縣民の力足らず未開國原野約五萬町歩に及び、現在の畑地にして尙粗放なる爲收利の極めて少なき七拾里余の日本海沿岸漁業遲々として進まず漁獲極めて少なき、鑛物の豐富なる石油事業は極めて有望なる、桑植地の余裕綽々たる、四十万町歩のふな其他雜木林の利用たる、蔓細工の有望なる、一つとして是等開發策の縣國致富策たらざるは無之將來の發達は活目して見るに足るべく候、加ふるに天然の風光は或は神鑿鬼斧の怪石仄巒に洪濤の咽ぶ男鹿の奇勝あり、若しくは天空神韻、漣波深碧を凝らす、所恰然瑞西の光景に髣髴たる幽境十和田湖あり、近來亦同湖の養鱒益々盛んにして花に團子の清樂を增し候或は日本第一の湖深、湖色を有する田澤湖あり秋田兩縣に誇りて雲表に聳ゆ東北富士の稱ある鳥海の靈山あり、天下の珍とすべき杉美林有り、人工的設備に於ける東洋一の稱有る小坂鑛山能代製材場あり各れも全國に向つて誇るに足るべきものあらざるは無之候如斯多種多樣なる開發源中我等に關するものにして而も遠大なる計劃を要し而も前途最も有望なるものを公有林野の整理、並に深山の未利用なる山毛欅其他雜木林利用開發に可有之存候蓋し現今の公有林たる使用せらる可き部分は極めて小部分にして其の多くの部分は何等の生産を爲す無く徒に放置して顧みられざるの狀況に有之候故に其整理に就ても主務省は極力整理に奬勵し縣に於ても益々歩を進め近き將來に於いて秣草採集地、植樹地、放牧地桑栽培地の區域劃然たるを見る可くかくして林業も合理的の經營を施し得べきと存じ候之に就ては森林法に於いて造林地兇粗なる國家の奬勵を植栽樹に對し、若しくは苗圃に對して相當補助金を下附する如き縣の奬勵指導の元に着々植樹造林の實を擧げ或は杉に落葉松に扁柏若しくは楓の分根造林に種木の矮林經營により前記遊猟林野も漸々綠化せられ申すべく候副産物に於ても亦椎茸の人工栽培製炭改良は年と共に餘遠の地に進歩し今や東都に輸出を見るに至れり、秋田獨特なる紫厥織は原料を紫厥の被綿に取り名聲盛大となり、近頃海外に輸出の道を講じ最も有望なる釣樟油の製造は至る所として繁茂せざるは無き釣樟より蒸餾して採集せられ原料の豐富なるに利益多きを見る、若しくは「アヤシャ」の葉を肥料、及飼料に供する等製造額の年々增加せるを見申し候頓として諸産業は浸々乎として衣巡する處を知らず更に一層の投資により事業の隆盛を見るべく今後十年にして亦本日の秋田を認めざるに至るべき進境

に立ち至るべきを信じて疑はず候、獨り是れ秋田に限りたるに有らず東北諸縣の狀態ならんかと想像致され候、如斯林業發達の機運に際し吾人林業に從事する者の研究を怠らず自覺息まず縣國の爲に盡力効献せんことを期せざるべからざる處に御座候、先は當地狀況御報申上候時候變り目の節益々御重御健勝あらん事を祈り上げ候敬首

（九月廿四日）

○出張中なる宮城大林區署

田中吟重君の便り

拜啓時下秋冷之候御會益々御繁榮之由大賀奉り候降て小生も無事消光罷在り候間御安意被下度候小生も宮城大林區署に赴任以來施業係を被命致し目下表記の處に出張罷在候先づは時節柄御自愛專一に

雜報

校内記事

神宮遷御式に關する講話

昨四拾二年拾月二日及五日、伊勢大神宮に於て神宮遷式擧行さるにつき、修身科に時間を使用して各生徒に對し遷宮の由來及神宮に關する適當の訓話をなすべき旨其の筋より通知ありしに付き本校に於ては二日午前九時より雨中体操場に於て修身擔任教諭高木先生の校長に代はりて一場の訓話ありたり今其の大要を左に掲げん

本日は伊勢神宮に於て御遷宮式を擧行せらるゝに付き神宮の由來及び神宮に關し適當なる訓話をなすべき旨其の筋よりの御沙汰により校長より御話あるべき筈なるが平素自分が修身科を擔任せる緣故からして自分にせよとの御命令辭しかたく當壇に登た次第であります

由來天祖の御神德の廣大なる事我國体の立派なるものなることは修身書に讀本に地理に歷史に悉く記載しありて三尺の童子も之を口にするので諸君に於ては尙更の事である問題は如何に結構なものでも曩耳にせる事は學識他宮で能辨達辨の士であれば迚も他を感動せしむる事は出來ない隨て諸君を益する事も出來ない然に貴重なる話先生の學科を缺いて自分が御話をすると云ふのは慚愧に堪へない併し播かぬ種ははいぬと云ふから今種をこぼして置いたなら他日時機を得て發芽する事もあらんと思ひますから御話を試みます

神宮の由來

天祖が皇孫瓊々杵尊をして豐葦原の中津の主たらしめんとして天降し給ふ時所謂三種の神器を御手ずから皇孫に給ふて「吾兒此寶鏡を見る事當に吾を視るが如くなるべし床を同ふし殿を共にし以て齋鏡たるべし」と爾來此勅を奉して蒼火々出見尊鸕鷀草葺不合尊より人皇第十代崇神天皇まで皇居中に祭られたりしが此帝は敬神の御心殊に深く同床して神威を

瀆さん事を恐れ皇女豐鋤入姫命を齋宮とし大和國笠縫邑に宮殿を設け別に鏡劍を模造し神代よりの寶鏡靈劍は此に御遷し申したのである尋て垂仁天皇の御代皇女大倭姫命豐鋤入姫命に代りて齋き奉る其れより神の敎により國々を巡る事二十六年にして伊勢國度會郡五十鈴の川上に鎭りましましたのである之が即ち今の內宮で夫れから外宮の第二十二代雄略天皇の御代に至皇大神が大倭姫命に敎へて丹波の國與佐の眞井の原よりして豐受大神を迎へ奉らる是れ同郡山田の原の新宮に鎭り給ふ外宮なのである垂仁天皇の御代に皇大神五十鈴の宮に遷らしめ給ひしなり四百八十四年この御一所にならせられてより二所何れも大神宮と申して同樣に尊崇せられて今日に至つたのである其間一千何百年榮枯盛衰種々樣々の時代を經過したのであるが稜威の尊嚴なる事は依然として變ずる事なく老幼貴賤の別なく一般に尊崇止まざるのである次に今上陛下の皇祖皇宗を尊崇し給ふ御模樣に付き洩し承る所を述べんに年中恒例の御親祭即ち一月の四方拜を始めとして十二月の賢所御神樂まで中々少からぬ事其他御遙拜勅使差遣御代參等より尙國家の大事は吉凶共に其都度御親告あらせられ又

偶御發布にある御勅語等にも大抵皇祖皇宗の御文字を拜見するにても其一斑を窺ひ奉る事が出來るのである偖又今般宮殿御造營の事に付て新聞紙上に現はれ居る事を摘出して見れば前回の御遷宮が明治二十二年十月第五十六回の正遷宮式で其際國庫金三十万圓を以て造遷宮使廳を設きて管せしめられたり此使廳は內務省內に常設せられ廿年毎の御造營は勿論平日の御修繕を司る官制によれば使副使主事技師屬技手等にて使は神宮祭主賀陽宮邦憲王殿下之に充てさせらる　宮殿の結構に付て色々聞及びたる事あるも畧して木曾御料林御用材の事に付き一言せん明治三十四年三月御見分ありて御柚山字駒ヶ根村小川字灰澤大桑村大字殿字腰澤吾妻村字水上と定められ同所より御樋代御船代伐採其他一般用材は木曾谷の中より檜二万本伐採其內長さに於て勝れたるは千本にて三丈六尺幅に於て勝れたるものは兩宮正殿の扇にて檜柾の一枚板御棟持の柱は長三丈四尺徑二尺五寸なりと云ふ是等は殆ど神代の良材にて現今にては木曾の外他になしと云ふ併し是れとても二十年に一回なれば次の六十二年にはより以上の良材は得らるまじとのことである

又御神寶御裝束其他附屬品等の調製に付ては先づ御殿の新築にて場所は墓地を去る一町以外とか敷地の四面には大廂の砂を撒布し地鎭祭をなすとか場內には注連繩を張り用水を設け鹽を盛り入るるを常とし平素品行方正なる模範職工二十人之に從事し支度は烏帽白丁が本式なれども今回は白衣に白の指貫との事である

斯の如く念に念を入れられ鄭重に鄭重を盡さるるとに外ならないのであるか樣に陛下に於せられては祖先の大切ある事を御實行以て吾々下民に敎を垂れさせらるると共に又詔勅を以て訓戒あらせらる即ち其一例を揚ぐれば敎育勅語に「此道は獨り朕が忠良の臣民たるのみならず又以て爾祖先の遺風を顯彰するに足らん」と宣はせ又戊申詔書に「我光輝ある國史の成跡」と宣ひて吾々が今日此聖代に遭遇するが出來るのも國史の成跡が與又吾々が忠良の臣民となつて祖先の遺風を顯し上下相須つて國運の發展を期する事が出來るのである故に吾々國民は現在に於て幅廣く共同一致して國家の爲めに盡すと共に又遠く深く祖先の遺德を追慕し祖先は子孫を思ひ子孫は祖先を懷ひ前後數千年をも一貫して一連領を以て結び付くる考を要するのである

三學年級の利用實習

出發十月十一日歸校十八日往復八日間

學術の眞隨に通ずる誠に實習に如くはなけん、こたび三學年級は運材實習として十一里の道程肅々として關伐木所に赴く、西澤敎諭指導のもとに隊員凡う三十名之を四隊となし、更に各隊を二組に分ち、各組午前と午後とに交互更替して從事する事となれり

昨日の學生今日の人夫、日雇と班を伍し各自鳶口片手に運材技術の妙を競ひ、思はず足ふみ辷らすあり、堀川に墜落するあり、終始勉勵この短期間に於て運材に關する眞智識を拾得したる事、蓋し鮮少にあらざりし終りに望み、闊伐木所の吾人に對し多大の便益と恩惠とを附與せられ、且所員諸公の懇切なる指導と盡力とを給はりしは、畢生忘却する能はざる處、茲に特筆して永く厚志を謝す

庭球部の遠征

昨は河中嶋の原頭に恨をのんで退いたる本校庭球部本校の嘱望を負えるチャンピオン諸君、爾后一意專心に朝な夕なに蘇山に鍛へあげたる腕を振ふ可き秋こう來れり、第八回縣下中等學校聯合大運動會は上田中學校に開かる可き時は來れり

十月十二日、十名の庭球撰手を送る意氣甚だ壯なりされど三度其の轍を踏まざらんを偏に祈りつ其戰勝の報に接するの日を掘指して待ちぬ

十六日、午后四時頃愉快なる戰勝の飛報に接し飛立つ思ぞしけり、嗚呼運機遂に熟したる哉祝すべし慶すべし而して大いに其勞を謝せさる可らず、かくして十八日、北信の野を踏み荒したる本校撰手、意氣天をも呑まんづる勢に一同を七〻笑に迎へぬ嗚呼親愛なる庭球撰手諸君吾等が嘱望するチャンピン諸君一歳ならずして其覇を永却に期せられよ

フレー、フレー、チャンピオン

川村理學士の講話

十月廿二日、數年以來菌蕈の研究に從事せらるゝ川村理學士の京都へ趣かるゝ途次、來校せられ午後一時半より講堂に於て、特に吾人の爲めに一場の講話を試みらる、其の大略の意左の如し

菌類の種類必要なれ共尙直接必要なる食用菌と毒菌の識別のみを掲載し種類は玆に省略す（文責記者にあり）

凡て何んたるを問はず判然たる識別法は甚た困難なり、故に毒菌と食用菌との識別の如きも正確なる境界をたつるが如き元より至難に屬す

例へば茄科に屬するものは朝鮮あさがほの如く皆有毒なれ共普通の茄子は食用に供せらる

又天南星科にても芋は毒ならざるが如し、殊に菌の中毒者は二三日にして死するを以て死後如何なる菌の爲めなるかを知ることすら困難なり

識別法

1、銀試法外國にては銀の匙を以て試む即ち菌を煮る際銀の匙を以て攪拌す、我國にては古來より銀の箸、銀簪を以てせり、兩者共に變色するときは其の菌は有毒なりとす、然れ共之れ元より精密なる區別法ならず何んとなれば硫化物を含まざるものは變色せざればなり

2、錫を有し根の膨脹して居るものは有毒菌なり但したまこたけを除く、故に是は必要なる識別法とす、然れ共錫を有するもならたけの如く根太からず其の一を欠除するものは此の限にあらずと知る可し

3、汁の白と黃なるものは有毒にして赤色なるものは無毒なり

4、惡臭を有するものは毒なり

耳つぶれの如く煙粉を出たすものは毒菌にあらず、幼稚の時代は西洋にては之を食用に供す

如斯き茸には尿素を含むことあり其の量人尿と略同じ即ち三パーセントを含有す

但し煙の出づるものは食道に入る時は差支なけれ共氣管に入る時は人体内にて繁殖するが故に害あり餅の表面に付くカビ（胞子）も同樣なり

食菌中松茸の如きも中毒を起すことあり是は發生して以來長き時日を經て内部變質せしが故なり

毒素は Cholin の Neurin 及び Muscarine に變せしものなり

茸は斯く論し來たれば危險多くして食用とすべきもの殆之れなきが如きも菌は蛋白質に富めるものにして人体の養料となるものなれば精細に之を調査して利用の途を講すること極めて肝要なり

次に近來又白木耳の栽培をなす者あり、白木耳は支那に多くして食用に供せられ一斤貳拾五圓位にして本邦又是れが栽培に適し將來椎茸よりも有望ならんか

天長節拜賀式

十一月三日、維時天長の佳節に當る、午前十時講堂に於て拜賀式を擧行す、嚴肅たる式場に、校長の訓諭を聞き國歌を奏せば、聖恩の山より高く海より深きを覺ゆ

謹みて、天長無窮の聖運を祝しまつり併せて國運の隆盛を賀し奉る

伊藤公追悼會

時維明治四十二年十月廿六日、明治第一の功臣、維新の元勳、伊藤博文公は韓國一兇徒の狙擊する所となり暴かに清國吉林省哈爾賓驛に斃す

嗚呼悲い哉、邦家の今日あるは日本國民の過去に累積したる精力を發展したるに因ると雖も公の力與つて又大なりしと云ふべし、さるに年七十に垂んとし一歲の行萬里を期し節冬來に向へ北滿の野に見學せらるゝ忠君愛國の厚きに非らずんは誰れか能く如此ならん、加之不測の難に遇ひ暴かに異境の地に斃せんとは、嗚嗚悲い哉、悼しい哉

皇上震悼勅して國葬を行はしめ上下官民哀悼せざるなし

十一月四日、伊藤公の國葬を行はせらる

本校に於ても公の靈を吊はんが爲め全日午前九時講堂に於て追悼會を擧行す

蕭々場内恰も水打ちたるが如く、校長より藤公事蹟に關する訓話あり寒涙胸底より湧出するが如き心地ぞしたり、本日は哀悼の意を表する爲め追悼會后休業す

此の日朝來愁雲空を鎖して陰靜の空模樣なりしが午前十一時頃遂に哀悼の涙は凝りて蕭々たる細雨となれり

坂上間宮両禪師の講演

十月廿九日、本校は信濃教育會駒蘇部會の當地に開催せられ、數多名士の集合せられたるを機とし、木曾出身にして興津清見寺の住職なる高德高き坂上禪師の講演を乞ふべく招聘す、

午前九時開會、群頭第一、隨行せる間宮禪師登壇、圓轉豁達の雄辯を振ひ、智識と共に精神修養の極めて緊要なる所以を痛論せられ學生をして感奮興起せしめ喝采場裏に降壇、次いで坂上老師徐ろに登壇、精神修養

の意義及び方法を論し、更に轉して林業の精神修養に最も好適せる所以に論及して結論せらる、其の間、論旨整然、眞理の邃奥を詳論し、聽衆いたく感に打たれ老師の降壇あるも尙ほ寂として聲なきもの稍〻多時―時に午前十二時

日義村發火演習

從軍記者

紅葉の盛り稍〻過ぎんとして秋風頻りに紅黃の片々を天空に弄び或は木曾の溪流に運び去つて錦の模樣を裝わんとする候日頃渴望止む時なかりし發火演習天高く晴れ渡りし十一月十三日、日義村小澤原に開かる午前十一時一同校庭に整列し之を南北兩軍に分つ

◎北軍想定

一、福嶋南方高地(俗稱小丸山)附近に於て不利の戰鬪を交へたる北軍の一個大隊は中仙道を薮原方向に退却中

二、南軍の一ヶ大隊は此の敵を追擊中なり

三、大隊長は川崎小隊をして日義村字小澤南方附近に位置を占め大隊の退却を援護せしむ

四、午後一時北軍大隊は日義村栗本を通過する際當小隊を以て南軍の追擊を沮止せしむ

注意

一、七笑橋は破壞の事

二、停止斥候七笑川附近に敷名

三、北軍は白帶を以てす

我大隊は小丸山に不利の戰鬪を得て急ぎ薮原方面に向つて退却す、今や小丸山を半里の上田に着くや斥候を出して敵の來るやを探らしむ、急ぎ急ぎて栗本を通過して七笑橋を破壞し南方なる河岸高地に於て我大隊は川崎小隊を以て敵の進擊を防がしむ、時正に午後一時今や晴れ渡りたる天空は一面薄墨を敷きたる如く薄き日の光は落ちし枯葉を輝す

折しも　伏せ―の一令はこだまにひびきて、各兵皆木の間石影に敵の來るを待つ、銃をうろへ目をいからして過ぎし彼方を打ちまもる有樣他所の見る眼も勇ましかりき、先の斥候は歸り來り報じて曰く、敵は正に此處を去る約拾五町の所に來れりと、數分ならずして敵の斥候栗本邊に出沒するを見る、我軍意氣益汪盛來らば茲に喰止めんは、もとより敵全滅させん方略をなす、續いて敵兵は小澤川を隔つる數町を迂回するを見る此時に當りて我小隊長は「靜カニ打チカ、レ」の命を下だす、銃聲と共に茲に戰鬪は開始せられぬ銃聲高く天地爲めに碎けん計り、偶敵兵の一部分は栗本より川を渡り横手より突入せんとす、我が軍は北村分隊をしてこれに當らしむ數分の後我軍は地の利を得んが爲め數町を退却す、勝ち誇りたる敵はつゞいて吾に迫る我軍小丘に之を迎へ打ち、激戰はこゝに開始す銃聲谷に答へ天震ひ地動くかと疑われ銃煙天にみなぎりぬ、時しも聞くラッパの聲に休戰の命は下りぬ

◎南軍想定

一、福嶋南方高地(俗稱小丸山)附近に於て不利の戰鬪を交へたる北軍の一ヶ大隊は中仙道を薮原方面に退却中

二、南軍の一ヶ大隊は此の敵を追擊中なり

三、南軍大隊の前衛なる第一中隊より尖兵として出されたる征矢野小隊は十一月十三日午後一時日義村字上田に到着せり

四、斥候の報告に依れば日義村字小澤南方附近に敵の一部陣地を占領するものゝ如し

午前十一時半、稍北軍に後れて正々堂々校門を出づ午後一時新開村字上田に到達す、先づ新田分隊長の率ゆる第四分隊尖兵前衛として進み長谷部第一分隊長本隊を率ゐて進む、已にして栗本に達するに七笑川の橋梁は凡て破壞せられたれば渡るに橋なし、茲に於て第一分隊を人家の蔭に潛めしめ、第二、第三、第四分隊は南方より進む、偶斥候來り報じて曰く「敵の歩兵約一小隊前面の高地を占領して吾を迎擊せんとす」進む事數町餘俄然響き渡たる銃聲、戰の緒茲に開かれたり「すわ敵こそござんなれ」いで來つて我が戟を受けよ、今日こう奮進猛擊、彈丸のあらむ限り刀劍の折れん限り衝いて衝いて全滅以て長驅せん、家蔭に隱れたりし第一分隊本隊の後援を得て將に七笑川を渡らんとす、地利あらずして、部下二名の負傷者を出したり、勇氣爲めに百倍し一擊の下に敵を全滅せんと、彼岸に渡りて本隊の渡川を援く

我これに合し彈丸を雨注せしも敵又なか〳〵頑强、茲に於て我れ躍進し益はげしく急射せしかば敵軍潰乱し殆ど其大半を壞しぬ

士氣大に奮いしが休戰の命ははしなくも下れり、勇壯慘憺なる大決鬪は終局を告げぬ時將に午後二時より中仙道に出で〻敵味方相擁して互に兵を談ず、

かくて午後四時隊伍を整えて校歌勇ましく歩武整々歸校す

赤浦先生の告別式

十二月廿四日、昨冬九年以來本校囑託教授として吾等が教鞭に盡力されし赤浦先生、帝室林野管理局本局へ御榮轉遊ばされ不日出發せらるゝに付き本日午前九時半講堂に於て告別式を擧行す、伊藤先生の校長代理として式辭、赤浦先生の答辭、松本清太氏の送辭あり之れにて式全く終ゆ

校友會彙報

矯風會設立

學生の風氣を刷新し我が校風を宣揚せんが爲め茲に矯風會なるものを設立せり、當撰せる役員左の如し

矯風會委員

第參學年生徒

松本　清太　長谷部　兵治　甲田　林　金田　美行　原　耕民

第貳學年生徒

德弘　正夫　藤田　要吾

第壹學年生徒

吉田　佐十郎

右本會矯風委員に推撰す（七月拾六日）

第參學年生徒

向井　政勝

第貳學年生徒

服部　啓二郎

第壹學年生徒

角田　久福

右本會矯風委員に推撰す（十月七日）

研究部記事

臨時會並に例會、例會四十二年七月拾八日

本日午後一時より雨中体操場に於て開會、江畑會長の開會の辭並に信越新聞主筆佐藤櫻戲氏の照介あり同氏は今回當本會地方に避暑旅行を試みられし途次立いて一場の講話を拜聽する事を得たり

氏は例の雄辯を以て所謂林業の必要論より始まり延て本校に亘り未來の國立山林學校たる事疑を入れずと諸君夫れ務め夫れ勵めよと結ばれたり

次に大澤縣參事會員登壇、懷舊談は偶々本校の上に論及せられ前佐藤辨士と同樣に結ばれたり

茲に於て會長閉會の辭を述べ續て本校生徒と教員養成所生徒との交誼を結ばれよと茲に於て閉會す

本會席に列せられたる名士左の如し

田中木曾支總長　八木郡會議長

西筑摩郡書記　養成所講師

他諸氏なかなか隆盛なりき

通常例會　九月廿五日

本日午後一時半より講堂に於て例會を開く

一、開會の辭　ゆく水　長谷部部長

一、松本中學校に於ける國語漢文講習會へ出席報告　高木先生

一、日露戰爭以後に於ける一變したる軍隊生活　征矢野先生

一、堅忍不拔の精神　宮澤慶一

一、渡邊國武先生の小年時代に於ける勉强　山本保

一、平湯温泉の紹介　木下稗造

一、森林生活の趣味　福田寛二

一、光陰輕んすべからず　德武國久

一、勉强　鎌鎗蝟太郎

一、吾人は如何にして萬物の靈長たるか　小林佐久馬

午後四時閉會

通常例會　拾二月四日

本日午後一時半より例會を開く

日頃名士の演舌に飽わたる校友、本日は帝室林野管理局技師内藤氏に一場の講演を乞へたる所幸御快諾せられ吾等は有益なる演舌に接する時機を得ぬ

一、偶感　内藤技師

人間學研究に付き高等學校時代よりの經驗談身に正義あらば如何なる場合と雖も恐るゝに足らざる可し、たとひ一寸の武器を身に持たつとも如何に多くの敵者が面前にひらめく短刀を以ておびやかすとも何等恐るゝに足らざる可し

否正義そのものが已に一の武器たるなり

諸君大いに人格を養成せられよ、一歩社會に踏み出たさんか評するものは一に之れ其の人の人物、人格云々を以てす而して正義を以て進め一約一時間一

一、偶感　伊藤先生

一、現代黄金崇拜病　北村竹次郎

右辯士降壇して長谷部部長種々の報告並に協議事項裁決後閉會を告ぐ時正に四時

臨時會　赤浦先生送別會

十二月廿四日、午前十時本校囑託教授にして當別會員たる赤浦先生の送別會を擧行す

伊藤副會長の開會の辭に續ひて長谷部研究部の送別の辭、赤浦先生の謝辭あり而して先生の萬歳を祝して閉會す、想ふに先生には去る卅九年以來一日の如く本校囑託教授として利用科を擔任せられ其の恩や實に鴻大にして其の去らるゝを悲むされども時代は有的の先生をして此處に止むることを許さずして將に東都ににられんとす其の御榮轉や大に祝すべし吁日頃敬慕禁し能はざる先生よ、たとい海山千里を隔たつとも或は陰に或は陽に舊倍の御盡力を願はされん事を切望し併せてます〳〵先生の健康と御多辨の程を希ふ

運動部記事

上田遠征庭球部報

ミツドルスワンプ男

明治四拾二年十月十二日午後全校生徒に見送られて出發、奈良井に着す、宿は「ヨヲ屋」一同大廣にて校歌を唱ふるあり、詩を吟するあり其優勢なる事恰も人を見たる「ベーヤ」夫れの如く　午後十時就床

拾三日一同馬車にて鹽尻に着、下り二番列車にて上田に向ふ午後三時上田着、上田中學校職員生徒の案内にて海野町小林方に宿取る、全夜は皆勞を感じ早々就床

十四日曉、起く上中撰手の盡力にて第二「コート」にて盛に練習をなす

午前八時より凡三十分の間我々は撰手「コート」にて練習を許され第四「コート」にて諸々方々の撰手と混じて練習す、上田中學撰手の待遇懇切余等感謝云ふ所を知らず

拾五日今日こそは晴の舞台なりと躍りつ舞ひつ互に勝たん事を警めあひつゝ上中に趣く

辟頭第一我校柳澤、伊藤組盡々として拍手場裡に現われぬ、審判は各校職員交々之を行ふ、彼松中の北折市川組い松中の御大將否縣下庭球部の御大將たり吾が柳澤組大いに戰ひしもいかで敵せん九險一籌を欠き遂に敵風に靡く嗚呼

松中〔北市〕　北折　市川　○×○○　山林〔柳伊〕　柳澤　伊藤　×○××

第十四回目に我木村小林組出陣

大いに振ひ敵をさんざん惱ませしも、之亦敗北悲しい哉

松商　×○○○　山林〔木小〕　木村　小林　○×××

第廿四回　我御大將向井小石組偉風堂々天下に敵なきが如し「プレー」の之に戰を開始す味方の獰猛なる事素的なり長野商業に勝ちし飯山中學の副將市村水野組も遂に吾れに敵する事能はず敗北す我意氣甚た旺盛なり沈みたりし勢漸くに加ふるを得たり

飯山〔市水〕　市村　水野　×××○×　山林〔向小〕　向井　小石　○○×○

上中〔飯馬〕　飯島　塙　×××　山林〔向小〕　向井　小石　○○○

我は勝に乘じ益加ふるに小石の「サーブ」は向井の「スマシング」と相俟つて着々効を奏し遂に三回の下に敵を破り我軍目出度優退しぬ

第三十三回に至り我校土屋安藤組出陣しぬ

こわいかに又もや不幸にして師範の御大將なる薄井大久保組の爲めに敗北す苦戰の樣思ひやられぬ

師範〔薄大久保〕　薄井　大久保　○○○○　山林〔土安〕　土屋　安藤　××××

第四十四回昨日より各校に目を付けられし中澤杉本組嚴然「コート」に現われたり、先づ飯山と戰ひ彼等を何の苦もなく吹き飛はし次に續ひて我に向ひたるは蠶業の副將組小笠原坂本組なりし

我中澤の熱球大いに振ひ敵の後衛を驚かしめ杉本之れに乘じて得意の「スマシング」之れ亦なか〳〵に敵を惱まし二勝二敗と云ふ珍なる勝負をなし觀集者をして手に汗を握らしむ、最後に一点にて勝負を決すに當り「ジエースアゲン」を繰り返すこと五六回遂に利あらず天なる哉命なるかな無殘や振ひに振ひし我軍茲敗北せり

一度は暗雲に敵われ中頃に至り清風一陣赫々たる光り現れたりし我校の武運今又一陣の黑雲に敵われ暗黯として我周圍を包み淺間下しの冷風又又我邊を襲ふてやまず嗚呼

又以て遺感とするところ如何ともなす能わず

飯山〔中金〕　中島　金澤　×××　山林〔中杉〕　中澤　杉本　○○○

蠶業〔小坂 本〕〔管原 ○〕〔山本 ○〕〔林 ○〕〔中杉 ○〕〔澤 ○〕

本年の成績比較をなさんに松本中學第一位を占め上田第二位蠶業第三位而して我校第四位に連る一般より觀るときは我校の成績可良なる事又以て知るべきあり今回我校に於て「ヤシ連」一人として無かりしは實に遺憾とする所若し我にして之れを得たらんには正に第二位を得る事論を俟たざる所なりき。松商師範の吾に力を入れし我に於て實に幸とせし所庭球部一同多謝する所なり

前途有望なる我撰手諸君奮へ〳〵

擊劍部

一、三月廿八日零時半より第二回体育會を催し我部は別記の組分けをなし勝負を決す、審判官は部長之れをなしたり、

一、拾壹月拾五日午後一時半より我校雨天体操場に於て福島警察署巡査の擊劍試合あり我校生徒と組合せ柴田克己師審判の下に勝負を決せり、午后四時頃迄に拾數組の試合あり終つて柴田先生より指導を受けたり校友會より當日同先生へ御禮として當地名產漆器會席膳五枚一組贈呈したり

我部にて最も遺憾とする所は指導教師のあらざる事之なり

以上

第二回体育會擊劍部試合組合

○〔中澤 亭四郎〕〔服部 啓次郎〕
〔上原〕〔石曾根四郎〕

○〔今井 健次郎〕〔多田 慶二郎〕
〔原 芳太郎〕〔濱 武雄〕

○〔吉澤 英雄〕〔吉田 佐十郎〕
〔伊藤 德之丞〕〔柏澤 國治〕

×〔磯村 忠二郎〕〔新田 益雄〕

○〔伊藤 憲一〕
〔上原 憲〕

×〔伊木 藤村 憲一 康明〕

○〔德弘 武國 正夫〕〔德久〕

○〔前田 寛一〕〔福田 喜代次郎〕
〔前田 喜代次郎〕

○〔木藤 憲一〕〔伊藤 信雄〕

×〔小服 池部 一 啓二郎〕

○〔北村 小林 竹次郎〕〔佐久馬〕

×〔石曾 前田 根四郎 喜代次郎〕

○〔神戸 木下 林 稔 三 藏〕

○〔今井 健二〕
〔小林 佐久馬〕

○〔伊藤 井出 昇一 幸吉〕

○ハ勝　×ハ分

弓術部

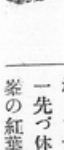
天保大居士

昨年五月新設以來此の技にこゝろざすもの多く日に月に進運の域に達するは誠に嬉しき限なり、抑弓矢の道は古來より我が國の最上の武器なりしなり、彼の義家朝臣は一玄弓を獻じて至尊御枕邊に立つて妖魔を鎭め奉りしが如き、世人の尊崇せし靈器なりしが今日文物の進化に伴ひて此の技を顧るもの無きに至れり、然れども弓術たるや優美にして高尚且つ吾人身体の健康を補益する事少ならざるべし

幸に我が校友會に於ても本部の設置以來弓矢ひく音の絶え間なく榮え行くは、之れ畢竟新設當時の先輩の賜物に外なからん

猶望むらくは本部の益々發展を計られん事を物はためしなり試に一度ひき見られよ當世の流行せるハイカラ病などには以て名醫の投せし妙藥の其の効より大なるならん

水曾川の流れはつきじ弦の音



◉紀念大運動會

秋もいつしか半はとなり紅葉の盛り稍過ぎんとして、吹く風寒く身にしめば、健兒の意氣轉た壯んならざるを得ず、此時に當り我校第八回紀念大運動會は開かれぬ、校門前には高さ數間に渉る大アーチ有り、校庭の周圍には紅白の幕を張り詰めたる、其他賣店、怪砲肚余興部の裝飾及び天空に飜る幾千の國旗は例年に異るなし、こゝに特別大書す可きは、嶄新奇拔なる飛行器の校庭横斷、大時計の設備是なり、空中飛行機の長さ約十間、空中高く校庭を自由に飛行し得る裝置頗る巧にして又大時計の進針するに從ひ大鐘時を報ずる、仲々に面白し、又赤十字社の設けあり、校庭の東隅に天幕を張り是又盛況を極めぬ、扨て午前八時號砲を合圖に職員生徒一同整列し校長の開會の辭に續いて競技は始まり、刻は一刻より進渉しつゝ、勝負はもとより時の運、深く顧るに足らざれども、是が斯會の目的たる勇壯の氣に至りてはいづれに甲乙の見ゆべくもあらずかくて十一時半、午前の部約三十回を歡聲裡に終へ、一先づ休憩せしが、其中に午飯を終へ午後の日は麗に紅葉に照り輝く中にいよ〳〵愉快に活潑に續行せ

しが、中に、小學校生徒の遊戯の無邪氣なる、長距離競爭の痛快なる、職員旅裝点燈の滑稽なる、教員養成所スプン競爭の優美なる劍舞の勇壯なる、東西古今の滑稽なる、八百ヤード、各級撰手千ヤード競爭の激烈なる、いづれも當日の見ものなりき

本日の月桂冠は二年生宮澤嘉一君の千ヤードに勝を得て本校校友會優勝旗並に時事新報寄贈の金牌受領三年生原耕民君の長距離競爭に勝を得て東京朝日の金牌受領、第三學年生市岡淳一郎君の八百ヤードに勝を得て大坂毎日の銀牌を手にしたるものなり、余興には劍舞の勇壯にして大喝采を博したる、東西古今の行列の滑稽にして歓客等しくへそに茶をはかさしめたる、何れも目覺しき花を咲かす、運動時事を報すべく怪砲壯あり大小洩らさず數百員を發刋したり、本日の賓客には郡長、判事、支廳員、税務署長、豫防事務所長、を主として其他各位父兄保証人同家族約五百名悉く晝餐を供す、場外を圍む參觀人の多數なる又數千を以て算したり

かくて六十餘回の競技も目出度く終り、怪砲亦第二十四號に終刊しければ、午後五時一同校庭に整列し校歌を唱し萬歳を三唱して解散しぬ

猶、進取の氣象にどめる我校が今年新しく始めしものには、赤十字社、裝飾部の發展、長距離競爭、時報部の發展等あり、來らむ運動會には又如何ばかり多くの新計畫出づるならんか、之れを思へば樂しい哉

會員の遠逝

▲特別會員百瀬重四郎先生　さる三十六年より四十年四月に至る迄終始一日の如く一意專心本校に教鞭を取らせられたる百瀬先生には同年同月南佐久郡立乙種農學校に御轉任遊され更に韓國政府の招聘に應せられ四十一年四月、京畿道なる驪州普通學校教頭に赴任せられし以來御熱心に韓國教育界の爲め御盡力せられつゝありしが突然病魔の襲ふ所となり昨四十二年八月六日遂に不歸の客となられる、嗚呼雄偉なりし先生の希望は空しく虎嘯く異境の地に消えしか、吁悲しい哉、前きに手塚先生の其の地に斃はれ今又百瀬先生の魂を此處に祭る何の因果ぞ哉

▲會員櫻井忠君　君には去る四十一年三月本校卒業後東京大林區署に奉職して一年有五ケ月にして不幸にも病魔の襲ふ所となり歸宅療養中藥石功あく遂に去る四十二年八月九日、黄泉の客となられたり、茲に謹んで吊意を表す

▲會員小林彪君　君にはさる四十一年三月卒業後熊本大林區署奉職中病に浸され歸郷治療中遂に昨四十二年九月十一日永眠せらる、哀い哉

▲會員松尾忠恕君　君には昨四十二年三月本校卒業後帝室林野管理局木曾支廳三殿出張所柿其伐木所に勤務中病の浸す所となり歸郷の途次同年十二月十二日遂に逝去せられたり、新進の技を以て將に光明を發揮せられんとする時空しく果てられぬ、嗚呼悲しい哉吁惜しい哉

特別寄附金報告

米山、江崎兩教諭へ紀念品贈呈醵金爲し下され候諸君へ紙上を以て乍略儀左に御芳名を掲載し以て御禮旁々領収の證に替へる次第に候間御承知の程願上げ候

（前號の續）

特別會員

一金壹圓四拾錢也　遠藤治一郎君
一金壹圓也　仁科春君
一金壹圓也　富崎二郎君
一金壹圓也　小池新伍君
一金壹圓也　岡田彌兵衛君
一金壹圓也　赤岩藤太郎君
一金壹圓也　宮崎惠喜太君
一金壹圓也　由尾忠輔君
一金壹圓也　肥後金四郎君
一金壹圓也　上條嘉一郎君
一金壹圓也　原田義治君
一金壹圓也　南村末吉君
一金五拾錢也　兒野榮君
一金拾五錢也　高樋博君
一金壹圓五拾錢也　金井澄美君
一金壹圓五拾錢也　和田宗吉君
一金壹圓也　西尾忠治君
一金壹圓也

通常會員

（前號記載洩の分）

一金參拾錢也　木村康明君
一金參拾錢也　宮澤嘉一君

合計金七拾八圓參拾七錢也（前號引照）

内分け左之如し

一金參拾七圓拾貳錢也　第四回以前の卒業生
一金拾壹圓參拾五錢也　第五回卒業生
一金拾貳圓拾錢也　第六回卒業生
一金九圓也　第三學年在校生
一金七圓八拾錢也　第二學年在校生

以上

右之通り相違無之候也

明治四十二年十二月廿四日　委員　松本清太　長谷部兵治　金田美行　伊藤憲一　藤田要吉　德弘正夫

紀念品贈呈に付きて

恩師米山、江崎兩教諭に贈呈すべき紀念品は銀側時計壹個宛と確定致し目下撰定中に有之両先生には已に目録進呈致し俣精算及び兩先生への御贈呈の割合等追て次號に御報告申可く候

◎廣　告

◎振替貯金又は郵便替爲を以て本費の會費（第九號雜誌代）を送付せられし諸君並に金額左の如し

一金壹圓　林　與五郎君　矢島駒二君

一金五拾錢　岡田彌兵衛君

一金參拾五錢　廣瀬靜之進君　遠藤治一郎君　松井定道君　南村末吉君　肥後金四郎君　一ノ瀬裂裴壽君

一金參拾四錢　武久貞一君　木村鍬次郎君

一金參拾錢　宮崎惠喜太君　前野慶一君

◎振替貯金又は郵便貯金を以て本會の會費（第拾號雜誌代）を送付せられし諸君並に金額左の如し

一金壹圓五拾錢　赤岩藤太郎君

一金壹圓　太田喜代松君　原四郎君

一金六拾五錢　一ノ瀬裂裴壽君

一金五拾錢　藤原周紫君　古根是君　脇田正義君　宮入汎省君

一金參拾五錢　岡戸廣治君　遠藤宗作君　小山田喜十郎君

一金貳拾五錢　武久貞一君　宮崎次郎君　本多清右衛門君

廣崎靜之進君　遠藤一郎君　松井定道君　宮崎惠喜太君　上田鉛二君　盛澤英一君　一木虎雄君　市川潔君　寺尾敬二君　横山治人君　前野慶一君　由尾忠輔君　南村末吉君　宮川永三君　肥後金四郎君　山下藤一君　北原利雄君　松澤莊太郎君　小池新伍君　中嶋要人君　北川信美君　平野正平君　小林泰一君　松尾忠恕君

（右は明治四十二年十二月廿四日迄領收の分）

木曾山林學校々友會庶務會計部

◎編輯局より

▲編輯局より一筆啓上仕り候

▲環ぐる月日に關守なく流れて茲に四十二年新玉の年立ちかへる春の日を迎へ候へしも今は已に月余の昔と相成り申し候

▲年茲に改まり萬般の百事皆新しき氣に充溢し心地よき程に、ひとり本誌の古くさく、内容の不完缺に不秩序なる、体裁の優美ならざる、心苦しき事とも、曩つ日、百尺竿頭一歩を進めて大いに振ふ可くして、其の實振ひ得さりしは、一重に生等編輯員の無能、無氣力の致す所と甚た慙愧に堪へす候

▲生等就任當時、自己の不能を顧す、經費の点をも深く考慮せす只々雜誌の編輯發刊以て足れりとせり蓋し愚人の致す所、劈頭堂々年三回、本誌發刊云々加之發行日月迄も記錄し漸く茲に第二回の發行を見る如き實に謝するに辞なく候

就任當時の意氣や甚だ盛なりし、而して期するに年三回の發刊を以てす、曾へて曩盡き筆刀折るゝも辞する處に非らざりし也、かくて堂々と發表したるものに候然かるに前號即ち第十號發刊するや、忽ち生等の頭上に落ち來たりしものは經費云々に候

生等は縮首して其の過を責め、自ら無能を憤慨致し候ひし、され共今に至りて悔とも詮あく、今後如何にせば諸君の意を充たす事をや得んと焦慮惜く時なかりしも又無能に今日に至り候ひぬ

▲顧れは我か研究雜誌部費は七拾圓に候ひし、然かるに第十號に於て已に六拾余圓を支出しゝあまず所僅かに拾圓强と相成り申し候

されど斯くてあるべきにあらねば終に庶務會計部に打ちあけ、會長に談合し準備金よりにても出金する事を得ば、直ちに發刊せんと思ひ立ち第十一號を豫告の十月十五日に發刊し以て諸君に謝せんと致し候ひしが、是も秋季大運動會費の爲めに遮られ遂に日月は經過し秋季運動會も無事終結す爰に僅かの餘裕を得て本一月

附錄

本校卒業生方向調
明治四拾參年一月現在

中に發刊せんものと編輯員一同冬期休業中寄宿舍樓上の編輯局に立籠り本誌編輯に從事致し候ひし所月末に編輯終り、本部顧問及會長の檢閲を經んと稿を托して各自歸省の途につき申し候

然かる所記事中如何はしき所ありて歸校后未だ原稿印刷所へ送附せられすして、いたく後れ從而發刊遂に今日に至り候ふ次第御ゆるし下され度候

▲明年度よりは今少しく本部の經費を增加せられ充分の發展せしめられん事を編輯員一同に代り冀望致し候

▲前述の如き次第にて遂に前約を履むこと能はす空しく、稿を殘して退くの止むなきに至り候

諸君幸に吾等が不敏を御諒察下され度候

▲吾等が無能にして何等なす所なかりしにも拘らす每々幾多有益なる玉稿を寄せられ、紙面を飾くれし殊に勤務御多忙なる卒業生諸君より多大の御援助を忝ふせし段一同に代りて深く御禮申上候

▲本誌編纂に付ては森、北村、遠山、澤木等の編輯員諸君の勞に依る所尠からす、茲に深く其の勞を謝し併せて今后一層の御奮勵を希望致し候

▲嗚呼生等が初期に把持せる抱負と氣慨とは徒に空想と終り其の內容は只先輩の語を繰り返すのみにて候ひし、誠に慚愧に堪えす候

▲かくして本誌は漸く諸君の机上に呈する事を得候何卒御笑讀下され內容体裁其他に於て心付の点有之候はゞ遠慮なく御忠告、御批評の程を願上候

▲さらば諸君、生等は是にて御別れ申すべく候

明治四十三年二月中旬

編輯員一同に代りて

長谷部兵治
宮澤清輔

研究部顧問申す

雜誌校友を世に出さんとて編輯員諸君の熱心努力せられし事感謝の外あらす冬期休業にて衆皆な歸省を急ぐの時獨り寄宿舍に留まりて雜誌の編纂に夜を更すなど諸氏の犧性を敬へんか實に意想外の多大也あゞ校友は斯如き無私の犧性の賜物なり物實に諸君の盡力に依る

寄贈雜誌（四十二年一月以降）

吉野林友會報　第四、五號　吉野林友會
田舍道　二、和歌山縣立農林學校々友會
校友會報　二、下高井郡立農蠶學校々友會
校友　五、六、七　長野市立商業學校々友會
校友會誌　三、飯山中學校々友會
盛岡高等農林會報十二月發行の分

卒業生方向調

任地及住所	姓名
（第一回卒業生）	
東京府西豐多摩郡郡氷川林業事務所	遠藤宗作
長野大林區署上田小林區署	齋藤正雄
長野縣廳內務部林務課	高樋博
北海道廳林務課釧路營林區署	岡戸廣治
長野大林區松本小林區署	宮下作治
富山縣廳勸業課	小瀧升太郎
松本小林區署	中村豐治
長野大林區署	原田義治
西筑摩田立村	林哲治
長野大林區岩村口小林區署	森正治
青森縣下北郡大湊村仝方物品販賣業	近藤昌平
廣島縣熊毛郡立龜子嶋農林學校	園原咲也
廣島縣廳內務部勸業課	戸爲九郎
北海道廳林務課	四郎
木曾支廳檜川分担區	原大森久治
石川縣石川郡役所	福田友治郎
岐阜縣林業技手	伊藤兵太
岐阜縣惠那郡役所	福井利吉
鹿兒嶋大林區仝小林區署	古根是
韓國臨時派遣步兵第一聯隊第六中隊	兒野榮
沖繩縣廳	坪倉藤三郎
鹿兒島大林區署	征矢野克巳
東筑摩郡片丘村	小松精內
西筑摩郡讃書村	松原三郎
同 福島町	原庄治郎
鐵道院總裁官房保建課	輪胡正由
青森大林區署	時田恒治
（第二回卒業生）	
兵庫縣美多郡役所	杉本貫
韓國統監府營林廠惠山鎮支廠	林與五郎
東筑摩郡片丘村	大熊俊彦
島根縣飯川郡役所	遠藤治一郎
栃木縣上都賀郡足尾鑛業所利根出張所	川岸滋治郎
木曾支廳阿寺伐木事業所	仁科春
島根縣隱岐郡役所	鵜飼政義
東京帝國大學林業課	平野正平
H. Hirasawa, Larnel, Mont. P. O. Box 46, K. S. A.	平澤政吉

長野大林區署經理課　林務技手　坂本忠治
長野市横澤町　原傳
伊勢津市榮町上野屋　林業技手　二三円　木村鎭治郎
足尾銅山古河鑛業事務所
石川縣羽咋郡役所（林業講習生）　二〇円　温井誠一
下高井郡立農林學校　西尾忠次
三重縣廳勸業課　林業技手　二〇円　武久貞一
伊豫國別子鑛業事務所　乙谷耕吉
北海道廳林務課　丸南勇治郎
韓國咸鏡南道惠山鎭陸桑木材廠　柳澤邦信
帝室林野管理局名古屋支廳白鳥貯木所　松井定道
秋田市龜ノ丁虎口字佐美方　林業技手　二五円　藤原周紫
南安曇郡安曇村　加藤純一
第七高等學校　中澤龜吉
鹿兒島大林區大根占小林區署　岩久宗治
山梨縣廳第三部　林業技手　二〇円　林卓治
伊豫別子住友山林課七番源出所　木下清
宇都宮聯隊看護手　大脇又衛
高知大林區西條小林區署　中嶋源一郎
西筑摩郡檜川村　倉澤貞
高知大林區西條小林區署　南村未吉
米國ヨリ歸朝シ目下長野赤十字病院ニ在リ　正又實治郎

（第三回卒業生）

群馬縣利根郡足尾山鑛業事務所利根出張所　山下藤一
M. Kiyosawa, 1527 TACOMA AVE. U. S. A.
小縣郡長瀨村　清澤巳未衛
青森大林區署廣田小林區署　林務技手　鵜殿正雄
仝　川内小林區署　柳澤熊治
熊本縣芦北郡官行伐木所　林務技手　小林桂一郎
能登國羽咋郡賀茂村　林業技手　二〇円　山下常記
木曾支廳薮原出張所奈川分担區　寺尾敬二
日義村小學校　千村重喜
更級郡役所　池井深一
帝室林野管理局札幌支廳　但馬廣造
豊橋騎兵第十九聯隊一ノ四　宮崎清太郎
帝室林野管理局識訪出張所　下畑德十
西筑摩郡吾妻村　北原利雄
陸前國氣仙郡唐丹村小白濱　代田善次郎
戸田讀

足尾銅山古河鑛業所　古畑金藏
豊橋工兵第十五聯隊第二中隊一年志願兵　杉本純平
帝室林野管理局木曾支廳　前野慶一
陸奥國南津輕郡本別小林區署　宮田實
西筑摩郡木祖村　寺島正治
石川縣珠洲郡飯田町　二五円　宮森太一郎
青森縣南津輕郡藤崎町　小藤作四郎
西筑摩郡福島町　宮下信一
越後村松小林區署　野知里慶助
西筑摩郡福嶋町　岡田彌兵衛
木曾支廳三留野出張所伐木掛　三宅周吉
青森大林區里石小林區署　木下安太郎

（第四回卒業生）

木曾支廳內　西野入德雄
木曾山林學校林業助手　川崎本雄
阿寺伐木所　宮崎二郎
在米國布哇　永田精一郎
長野大林區署　澤田貞次郎
岩手縣廳林業課　廣瀨靜之進
名古屋市南區熱田旗屋町矢島森之助方　二五円
青森大林區署　林業技手
長野縣北安曇郡常盤村　和田宗吉
長野小林區上高井郡保科保護區官舍　肥後金四郎
東筑摩郡役所　宮崎源一郎
長野大林區飯山小林區署　大島角藏
韓國統監府新義洲營林廠　赤岩藤太郎
青森大林區署施業係　林務技手　市川潔
南佐久郡大澤村　水野忠一
西筑摩郡福嶋町　三原昇
越後北蒲原郡五十公野小林區署　小澤順
伊豫國新井郡大久保村住友山林課　新井喜多雄
上田小林區署和田保護區　上條嘉一郎
長野大林區署　竹內房太郎
青森大林區仝別小林區署　松嶋九平
木曾支廳王瀧出張所　木村晉治郎
長野縣廳林務課　中島昌利
長野大林區松本小林區署　肥田幸一郎
帝國大學林學科助手　小林恭一
西筑摩郡福島町　武居文作
仝　駒ヶ根村上松　矢嶋駒治
由尾忠助
太田喜代松

仝　駒ヶ根村上松　五年村和田し[illegible]代用[illegible]

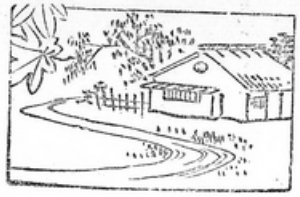
（第五回卒業生）

千葉縣君津郡久留里小林區署　平田稻男
西筑摩郡福島町　林省三
木曾支廳王滝出張所　千村善三
西筑摩郡讀書村　奥原吉右衛門
木曾支廳關伐木所　樋口勇
仝　阿寺伐木事業所　北川信美
下伊那郡上飯田村　小池新伍
栃木縣那須郡黑磯澤太出原小林區署　久保田傳一郎
死亡　横山治人
足尾銅山古川鑛業會社足尾鑛業所利根出張所　小林彪
山梨縣北都留郡丹波山村泉谷東京府石林内　池田藤三郎
和歌山縣東牟婁郡新宮小林區署　宮崎惠喜太
長野大林區署　中俣伍市
北佐久郡岩村田小林區署　北澤時三郎
上高井郡山田村　水橋要作
死亡　櫻井忠
長野小林區署　金井澄水
長野大林區署　瀨在寶
岩手縣上閉伊郡遠藤小林區署　藤卷壽一
岐阜縣高山町高山小林區署　松澤萬吉
愛知縣羽栗郡淺井町　鵜田義正
石川縣能美郡役所　二五円　宮城忠藏
岐阜縣吉城郡舟津町舟津小林區署　上田鉉二
秋田縣七日市小林區署　高橋金作
東京大林區署　竹内茂
西筑摩郡木祖村　寺嶋俊一

（第六回卒業生）

福島縣廳林業技手　一五円　松澤莊太郎
木曾支廳湯舟澤出張所　倉科浦一郎
青森縣上北郡横濱村同小林區署　本多清右衛門
埴科郡五加村　宮入汎省
熊本大林區下赤製材所　一ノ瀨袈裟壽
宮城大林區署　原喜四三
大阪大林區署　栗之原治平
東京大林區署　岡戸都二
豊橋歩兵六〇、一三　蜂須賀宮二郎
豊橋歩兵六〇ノ三　宮川永三
山梨縣北巨摩郡新富村　一木虎雄

南佐久郡北牧村　島田雄太郎
木曾支廳阿寺伐木所　中島要人
宮城大林區署　仲田惠令
宮城大林區署　南勝右衛門
宮城大林區署　田中吟重
西筑摩郡新開村上田小學校　山村治一
西筑摩郡新開村　向井長治郎
長野大林區署　中田長雄
秋田縣北秋田郡長木澤國有林多々良澤官行事務所　原七郎
埴科郡松代町　野村光智
長野大林區署經理課　若林遊龜尾
西筑摩郡大桑村　洞山鹿之助
仝　王滝小學校木曾支廳橋川　芦澤庸三
岩手縣澤内小林區署　埴澤英二
東京大林區署　原田英二
宮城大林區署　原田羅助



明治四十三年三月十五日印刷
明治四十三年三月二十日發行

長野縣立木曾山林學校
編纂兼發行者　校友會
長野縣立木曾山林學校
發行所　校友會雜誌部
長野縣長野市西長野町二百卅八番地内三番
印刷者　堀賢吉
長野縣長野市旭町二十七番地
印刷所　信濃新聞株式會社